

宿でも心配して醫師を呼び、一座の者も親切に看病して與つたんですが、六三郎は一晚の中に滅切り瘦せ衰へて了りました。あくる日は到底起きることはできません。大事の人氣役者に休まれては芝居の景氣にも障るといふので、皆なも心配しましたが、こればかりは何うも仕様がありません。六三郎はとうとう舞臺へ出ることができませんでした。それから二日で、この芝居も千秋樂になりましたが、六三郎はまだ床を離れることができませんでした。身體は日増に衰へて行くばかりです。美しい顔も幽霊のやうに寢れて了つて、手にも足にも血が通つてゐるとは見えません。唯、血走つてゐるのは凹んだ眼ばかりです。

この一座はこれから信州の方へ買はれて行く約束になつてゐるので、いつまでも此處に逗留してゐる譯にも行きません。殊に芝居が濟んで了へば、其後の宿屋の雑用などは自分達の負擔になるんですから、大勢の

者は唯遊んでゐる譯には到底行きません。と云つて、病人を置去りにして行くほどの不人情な人達でもなかつたので、芝居を打揚げてから二日目の朝、半分は死んでゐるやうな六三郎を山駕に乗せて、一座の子供役者は此の土地を立退くことになりました。座頭の役者は見送りの人々に對つて『來年も又御厄介になります』と挨拶をして別れました。山國の秋は俄に寒くなつて、今朝は袷でも欲しいやうな陽氣でした。

お江戸の役者が發つと云ふので、これまで幾日か白粉の香に酔はされてゐた此町の娘子供などは、名残惜いやうな顔をして見送つてゐました。中には悲しさに涙ぐんでゐるものもありました。取分けて肝腎の花形の六三郎の願が駕籠の垂簾にかくされてゐるを、残惜く思ふ若い女も澤山あつたでせう。その中で唯一人、路傍の柳のかけに立つて、六三郎の駕籠をじつと睨んで『畜生——いゝ氣味だ。』と冷笑つてゐる女がありました。

た。

お初は生きてゐたんです。

親分の吉五郎は苦勞人で、大勢の乾兒の面倒も見てゐる男だけに、お初と六三郎との情交を聞いても、生かすの殺すのと云ふやうな、この社會に有勝な野暮は云はなかつたんです。そこで先づお初を自分の家へ呼付けて、おだやかに詮議を始めると、女も流石に江戸つ子です、自分よりも年下の六三郎に關係した始末を、些とも悪びれずに白狀して、親分のお目を掠めたのは妾が重々の不埒ですから、どうぞ御存分になすつて下さいましと、潔く自分の身體を投げ出してしましました。これが甚く吉五郎の氣に入つて、『よく綺麗に白狀した。で、お前は十歳も年の違ふ六三郎と夫婦になりてえか。』と訊きましたら、お初は『さうなれば自分には本望です。弟だと思つて面倒を見て遣ります。』と正直に答へたさうです。

です。

それを聞いても吉五郎は憤りませんでした。『可、お前がそれほどに思つてゐるならば、俺が媒介をして六三郎と一所にして遣るから、いつまでも可愛がつて遣れ。併し相手は子供だ、加之に旅を廻る藝人だ。好加減に欺されてゐちやあ詰らねえから、全く相手の方でもお前を思つてゐるか何だか、よく其性根を試した上で、俺の方から本人に話を付けて遣らう。まあ、其意で待つてゐる。』と云ふので、それから一趣向して六三郎を呼び付けたんです。お初の顔や身體には糊紅を塗つて、なぶり殺しにでもされたやうに拵へて、座敷の隅へ轉がして置いたんです。さて彼の六三郎は之を見て何うするか、その出様に因て其の本心を探る術もあると、吉五郎は窺かに窺つてゐると、年の若い、氣の弱い六三郎は其の試験に悉皆落第してしましました。

「お前は此の女を知つてゐるか。」と訊かれた時に、六三郎は「知らない」と答へました。この一言で、こりやあ駄目だと吉五郎に見限られました。死んだ振りをしてゐたお初も、あんまりな人だと大層口惜がつたさうです。六三郎が歸つた後で、お初は吉五郎の前に手をついて、改めて自分の不埒を詫びた上に、あんな奴のことはふつゝ、思ひ切りますから、どうぞ是れまで通りにお世話を願ひますと、心から涙を零して頼んださうです。

可哀さうなのは六三郎です。自分の思ふ女に見限られたばかりか、それが根となつて病は重るばかりで、皆なと一所に信州までは兎も角も乗込んだものゝ、到底舞臺の人にはなれさうもないので、旅先から一座の人々に引別れて、殆ど骨と皮ばかりの哀れな姿で、故郷の江戸へ歸つて來ました。六三郎の家は深川にありました。それからどつと床に着いて、

明けて十七の春、松の内にとら／＼死んで了ひました。其の枕邊には毎晩蒼い顔をした女が坐つてゐたなど、云ふのは、六三郎の囁語でも聞いた人が尾鱗を付けて云ひ觸らした怪談で、お初は明治の後までも甲州に生きてゐたと云ふことです。

——をはり——

## 刺青師の話

(一)

某美術家は語る――

「さあ、世の中にどうも面白い話といふのも無いもんでねえ。何、江戸式の話をしると……。そんな粹なことは此方の畑にないんだよ。だが、まあ仕方がない。何か話さう。」

僕も書を描くのが商賣だから、あの刺青といふものにも趣味を有つて

多少研究したこともあるんだ。で、二三人の刺青師とも懇意になつたが、何しろ表向は法律で禁じてあることだから、明治以來漸々に衰へて、刺青師なんて商賣は自然に消滅して了つたのさ。僕が會つて識つてゐた刺青師の中で、源七といふ老爺さんは既う七十位で、勿論今は刺青を商賣にしてゐるんぢやあない、息子に袋物商の小さい店を出させて、樂隠居といふ程でもないが、差して不自由もなく暮してゐた。

この老爺さんは朝と晩とに必ず錢湯に行く。僕が懇意になつたのも朝湯が始りて、「旦那は若い癖に熱い湯が好きですわねえ。」と云つたやうなことが縁になつて、毎朝逢ふ度に挨拶をする。「江戸の昔話でもするから些と遊びにも出でなさい。」と云はれたので、暢氣な僕はのこく遊びに行く。源七老爺さんは動物園の河馬を見たやうな肥つた大坊主で、鬼のやうな獅齧ッ面をしてゐるが、動もすると吃驚するやうな大きい聲で、あは、

いゝと突然に笑ふんだ。僕も馴れない中は時々驚かされたよ。

何でも歳暮の廿八九日頃の寒い朝だと覚えてゐる。僕が例よりも少し遅れて朝湯へ行かうとすると、向ふから源七老爺さんがぶらぶら行つて来た。湯歸りと見えて、烟の立つ濡手拭をねんねこの肩に引つ掛けて、片手を懐にして少し反身で、片手には何處で買つて来たのか一尾の河豚をぶら下げてゐた。

「やあ、お早う。」と聲をかけると、老爺さん例に依つて大きな身體を揺つて笑つた。

「大層遅いぢやありませんか。若い人はそれだから不可ねえ。もうこれ歳の暮ですぜ。私なんぞは到底もこの歳暮は遣切れねえから、覺悟を決めて此の通りだ。あはいゝいゝ。」と、ぶら下げてゐる河豚を見せた。

僕も笑ふと、老爺さんも亦笑つた。「まあ、悠然お湯へ入つて、好い兒

になつても出でなさい。」と云ひながら、老爺さんは悠々と行つて了つた。成程、歳暮だ。兩側には既う松飾を立てた家が澤山ある。この松飾を背景にして、江戸式の大坊主が湯歸りに河豚をさげてぶらぶら行く。僕は其後姿を茫然見送つてゐる一刹那、自分は往來の真中で江戸の昔の夢を見てゐるのではないかと疑つたよ。源七老爺さんといふのは、まあ其んな男なんだ。

で、僕は老爺さんの許へ度々遊びに行つて、店の頭へ遠慮無しに腰をかける、對手欲しやの老爺さんは店火鉢を押し出して来て、色々の話を始める。息子といふのは寡言の極堅い男で、黙つて其側で誂への仕事をしてゐるんだ。この老爺さんから江戸の話は澤山聞いたが、その中で刺青に關する斯んな話があつた。

何でも江戸時代も末に近い、文久頃の事ださうだ。電車も自働車もな

い江戸市中で、唯一の交通機關といふのは例の駕籠屋で、何でも大傳馬町の赤岩、芝口の初音屋、淺草の伊勢屋と江戸勘、吉原の平松なんて云ふのが其中で幅を利かしたもんださうだ。多分その初音屋の暖簾下か出店か何かだらうと思ふが、芝神明の近所に初島といふ駕籠屋があつたさうだ。中々繁昌する店で、いつも十五六人の若い者が轉がつてゐた。

親父は清藏、息子は清吉と云つた。清吉は今年十九で、色の白い、細面の粹な男で、斯ういふ商賣の息子にはお誂へ向に出来上つてゐたんだが、唯一つの瑕といふのは身體に刺青のないことだ。何故といふのに、この男は小兒の時から身體が弱くつて、絶えず醫者と藥の御厄介になつてゐたので、兩親も到底もこの家の商賣は能まいと諦めて、小兒の時から方々へ奉公に出した。が、どうも斯ういふ道樂稼業の家に育つた者には、堅氣の奉公は能難いものと見えて、何處へ行つても辛抱が續かず、

十四五の時から家へ歸つて清元のお稽古か何かして、唯ふらく遊んでゐる中に、蛙の子は蛙で、矢つ張り親の商賣を受け嗣ぐやうなことになつて了つた。年は若し、男は好し、稼業が稼業だから相當に金廻りは好し、先づ申分のない江戸つ兒なんだが、裸稼業には無くてならぬ刺青が能ない。刺青をすれば死ぬと、醫師から固く誠められてゐるんだ。困つたね。

## (二)

文明とか野蠻とか云ふ難しい議論を爲ちやあ不可い。この時代の職人や仕事師には、何うしても喧嘩と刺青との縁は離れないのだ。取分けて裸稼業の駕籠屋の脊中に刺青が無いと云ふのは、龜の子に甲羅が無いのと同じやうなもので、先づ通用にはならぬと云つても可い。いくら大き

い店の息子株でも、駕籠屋は駕籠屋だ。いごと云ふ時には、お客に脊中を見せなければならぬ。裸稼業の者に取つては、刺青は一種の衣服で、刺青の無い身體をお客の前に持出すのは、普通の人が衣服を着ないで人の前に入るやうなものだ。

まあ、それほど無いとしても、刺青の無い駕籠屋と、掛聲の悪い駕籠屋といふものは、甚だ幅の利かないものに數へられてゐる。清吉は好い男で、若い江戸つ兒だ。刺青が無くつちやあ實際可哀想だよ。今日の僕等ですへも然う思ふんだから、其時代の空氣の中に生きてゐる清吉の身になつたら、嘸ど肩身が狭かつたらうよ。掛聲なんぞは練習次第で何うにでもなるが、刺青の方は然うは行かない。體質の弱い人間が生身に墨や朱を注すと、生命に關はると昔から決つてゐるんだ。

脊中一面の刺青を見て、威勢が好いとか粹だとか云ふ人は、その威勢

の好い男や粹な大哥になるまでの苦痛を十分に察して與らなければならぬ。同じく生身を窘めるのでも、灸を据ゑるのとは少し譯が違ふんだ。第一に非常に金が費る、時間が費る。錢二百や三百持つて行つたつて、物の一寸と彫つて呉れるものぢやあない。又、どんなに金を積んだからと云つて、一度に入寸も一尺も彫れる譯のものぢやあない。そんな亂暴なことをすれば、忽ちに大熱を發して死んで了ふと傳へられてゐるんだ。要するに少しづつ、根氣好く彫つて行くのが法で、いくら焦つても急いで、半月や一月で俱利迦羅紋々の立派なち大哥さんが無造作に出來上るといふ譯には行かないんだ。

刺青師は無數の細い針を束ねた一種の籠のやうなものを用以て、徐に叮嚀に人の肉を突き刺して、これに墨や朱を漸々に注して行くのだが、朱を注すのは非常の疼痛で、大抵の強情我慢の荒くれ男でも、朱入の刺

青を仕上げるまでには、鬼の眼に涙を幾たびか零すさうだ。加之も大抵の人は中途で必然多少の熱が發て、飯も食へぬやうな半病人になる。こんな苦惱を幾月か辛抱し通して、こゝに初めて一人前の江戸つ兒になるんだ。どうして中々樂ぢやあない。

こんな譯だから、生きた身體に刺青など、云ふことは、到底虚弱な人間の能る藝ぢやあない。清吉も近來は大分健康になつたと他も云ひ、自分も然う信じてゐるんだが、土臺の體格が孱弱く出來てゐるんだから、到底刺青なんて云ふ荒行の能る身體ぢやあないんだ。勿論、方々の醫師にも診て貰つたが、何處でも申合はしたやうに、お前の身體には決して刺青などをしては成らぬ、そんな亂暴なことをすると命が無いぞと、脅すやうに誠められたんだ。が、何うも思ひ切れないので、方々の刺青師にも相談して見たが、これも一應は清吉の身體を檢めて、お前さんは不

可ねえと頭を掉つた。

醫師にも誠められ、刺青師にも斷られたんだから、既う仕様がなない。あたら江戸つ兒も日蔭の花のやうに、明るい世間へは出られない運命を荷つて、肩身を狭く世を送つてゐたんだ。どう考へても可哀さうだよ。寧ろしが、半端人足だつたら、何うも仕方がないと諦めて了ふかも知れないが、惣ひ相當の家に生れて、立派な大哥株で世間が渡れる身體だけに、猶々辛かつたらうよ。

店に轉がつてゐる大勢の若い者は、皆なその脊中に黒や朱の美しい色彩を脊負つてゐるんだ。或者は雲に駕する龍を彫つてゐた。或者は巖に倚る虎を彫つてゐた。或者は義經を脊負つてゐた。或者は辨慶を脊負つてゐた。或者は天狗を描いてゐた。或者は美人を描いてゐた。此の如き人工的の裸體美が澤山ごろくしてゐる中で、大哥と呼ばれる清吉一人



が、生れたまゝの生白い肌を晒してゐると云ふのは、幅の利かないこと夥多しい。若い者だから無理はないよ、清吉は他に内所で涙を拭いてゐることも有つたんだ。

この初島の近所に梅の井とか云ふ料理茶屋があつて、これも可成に繁昌してゐたさうだが、其家の娘にお金ちやんといふ美しい女がゐた。清吉とは一歳違ひの十八で……と云つて了へば、大抵まあ話は判つてゐるんだ。ねえ、然うだらう。

江戸に生れた若い男と女の戀、これを詳しく説明したら、定めて大向ふを騒がすやうな清元式の濕場や何かもあつたんだらうが、源七老爺さんは戯作者でもなかつた、狂言作者でもなかつた。唯簡短に『到頭二人が出来て了つたんですよ。』と云つたばかりだから、些と物足りないが仕方がない、僕も其まゝに取次いで置かう。

まあ、何しろそんなことで、お金清吉と云ふ相合率が出来たと思ひ給へ。兩方の親達も薄々承知で、まあ出来たものなら將來は一所にして與らう位に思つてゐたんだ。芝居でするやうに、こゝで敵役の惡侍なんぞが邪魔に入らないんだから、一向面白くもないやうだが何うも仕方がない。が、こゝに鳥渡小波瀾が起つた。と云ふのは、何でも或日のこと、その梅の井の門口で酔つ拂ひが二三人で喧嘩を始めた處へ、丁度彼の清吉が通り合はせて、見てもゐられないから留男に入つた。對手は酔つてゐるので何か愚圖々々云つたので、清吉も癢に障つて肌を脱いだ。すると、對手は冷ら笑つて、『へん、刺青もねへ癖に、乙う大哥振つて肌を脱ぐな。』とか何とか云つたさうだ。

それを聞くと清吉は赫となつて、まるで狂人のやうになつて、穿いてゐる下駄を把つて對手を滅茶々に殴り付けたんだ。對手も少し氣を吞

まれたんだらう、加之に酔つてゐるから到底敵はない、這々の體で起き  
つ轉びつ逃げて了つたので、まあ其場は納つた。梅の井の家内の者も門  
に出て、最初からそれを見てゐたんだが、其時に家の女房、即ちお金の  
阿母が何の意無しに、「あゝ、清さんも好い若い者だが、ほんとうに刺青  
の無いのが瑕だねえ。」と、斯う云つた。それがお金の耳にちらりと入る  
と、これも何だか赫とした。自分の可愛い男に刺青の無いと云ふことは、  
恥かしいやうな、口惜いやうな、云ふに云はれない辛さを感じたのだ。

(三)

勿論、清吉が堅氣の人であつたら、刺青の無いと云ふことも別に問題  
にもならず、お金も何とも思はなかつたのであらうが、對手が駕籠屋の  
息子だけに何うも困つた。お金の阿母も固より悪意で云つた譯ではない、

將來は自分の娘の婿にならうといふ人を侮辱する料見で云つたのではな  
い。何の意も無しに口が滑つたのだ。それはお金が能く知つてゐたが、  
それでも何だか口惜いやうな、面目が悪いやうな、自分の男と自分が  
同時に侮辱されたやうに感じられたのだ。それも温順い娘ならば、胸に  
思つた丈けのことで済んだのかも知れないが、お金は頗る勝氣の女だ。  
赫となると同時に門口へ駈け出して、幾分か阿母に面當の氣味もあつた  
らう、「清ちやん、何故お前さんは刺青をしないんだねえ。」と、今や肌を  
入れやうとする男の脊中を、平手でびしやりと叩いたんだ。

事件は單にそれだけのことだ。惚れてゐる女に脊中を叩かれたと云ふ  
だけのことだ。が、それだけのことでは済まなかつた。前にも云ふ通り、  
梅の井の家内の者も大勢そこに出てゐた。喧嘩を見る往來の人も集つて  
ゐた。その衆人環視の中で、自分の惚れてゐる女に「刺青がない。」と云

はれたのは、胸に焼鐵と云はうか、眼の中に錐と云はうか、兎にかく清吉に取つては急所を突かれたやうな疼痛を感じたんだ。

お金の阿母は清吉やお金を侮辱する意で云つたのではなかつたが、お金の耳にはそれが一種の侮辱のやうに響いた。お金も亦、清吉を侮辱する意では無かつたらうが、清吉の身にはそれが侮辱のやうに感じられたんだ。畢竟、感情の行き違ひと云つたやうな譯で、左らでも逆上せてゐる清吉はいよ／＼赫となつた。然らなると、男は氣が早い。物をも云はずにお金の島田を引つ摺んで、往來へ横つ倒しに捻倒すと、生憎に水が撒いてあつたので、お金は可哀さうに帯も着物も泥まぶれ……。でも、利かない氣の女だから倒れながら嗚鳴つた。

「清ちゃん、妾を何うするんだえ。腹が立つなら寧ろ男らしく殺して呉れ。」

清吉は既う逆上切つてゐたと見えるんだね。勿論、本當に殺す意でもなかつたらうが、汝ツと云ひながら又ぞろ自分の下駄を把つたんだ。梅の井の人達も驚いて飛出して、右左から清吉を抱き縮めて了つたが、斯うなると阿母が承知しない。

「清ちゃん。何だつて家の娘をこんな酷い目に遭はせたんだえ。刺青が無いから無いと云つたのが何うしたんだ。お前さんは何と思つてゐるか知らないが、それは妾の大事の娘なんだよ。指でも差すと承知しないから……。巫山戯た真似をお爲でないよ。」

お金と清吉との關係を萬々承知ではあるけれども、自分の見る前で可愛い娘をこんな目に遭はされては、母の身として堪忍が能ない。此方も江戸つ兒で、料理茶屋のお内儀さんだ。腹立紛れに頭から罵倒すやうに嗚鳴付けたから、いよ／＼事件は面倒になつて來た。清吉も黙つてはゐ

られない。

「えい、撲らうが殺さうが俺の勝手だ。この阿魔は俺の女房だ。」

「洒落たことをお云ひでない。お前さんは誰を媒妁人に頼んで、何時の幾日に家のお金を女房に貰つたんだ。神明様の手洗水で顔でも洗つてお出でよ。ほんとうに馬鹿々々しい。」

阿母は疊かけて罵倒したんだ。いくら口惜がつても清吉は年が若い、口の頭の勝負では到底この阿母に敵はないのは知れてゐる。それでも負けない氣になつて二言三言言ひ合つてゐる中に、周囲には愈よ人立がして來た。阿母の方でも悶つたくなつた。

「お前さんのやうな唐人を對手にしちやあゝられない。何しろ、お金は妾の娘なんだからね。常人同士どんな約束があるか知らないが、お金を貰ひたけりやあ其の背中へ立派に刺青をしてお出でよ。」

阿母は凱歌のやうな笑ひ聲を残して、奥へずん／＼入つて了つた。

お金は何にも云はずに行つて了つた。取残された清吉は身顛ひするほどに口惜がつた。

「汝、今に見ろ！」

其足で直に駆込んだのが源七老爺の家だ。老爺は其頃宇田川横町に住んでゐて、近所の人だから相互に顔は知つてゐた。

(四)

同じ悪口でも、寧ろ馬鹿とか白痴とか云はれたのならは、清吉も左ほどには感じなかつたかも知れないが、平生から自分も苦に患んでゐる我が弱點を眞正面から突かれたので、その悪口が一層痛切に身に堪へたんだらう。源七に對つて、何でも可いから是非刺青をして呉れと頼んだが、

老爺も素直に諾とは云はなかつたさうだ。

「お前さんは身體が弱いんで、刺青をしないと云ふことも豫て聞いてゐる。まあ、止した方が可いでせうよ。」

こんな普通の意見は、逆上切つてゐる清吉の耳には入らう筈がない。邪が非でも刺青をして呉れ、それでなければ男の一分が立たない。死んでも關はないから彫つて呉れと、斯う云ふんだ。源七も仕方がないから、まあ兎も角も念の爲に其身體を極めて見ると、成ほど不可い。こんな孱弱い身體に朱や墨を注すのは、毒を注すやうなものだと思つた。が、當人は死んでも關はないと駄々を捏ねてゐるんだから、此上に既う何とも云ひやうが無い。それでも商賣人は馴れてゐる。

「それほど御望なら彫つてあげても可いが、今日はお前さん酔つてゐるやうだから止なす。」

清吉は酔つてゐないと云つた。今朝から一杯も酒を飲んだことはないと云つた。源七は其の脊中の肉を撫で、見て、少し考へに、

「いえ、酒の氣があります。酒を飲まないにしても、味淋の入つたものを何か喫べたでせう。少しでも酒の氣があつては、彫れませんよ。」

酒と違つて、味淋は普通の煮物にも使ふものだから、果して食つたか食はぬか自分にも判然とは解らない。これには清吉も些と困つた。

「味淋の氣があつても不可ませんか。」

「不可ません。少しでも酔つてゐるやうな氣があると、墨は皆な散つて了ひます。」

刺青師が無分別の若者を扱ふには、いつも此手を用ひるんだ。この論法で、今日も不可い、明日も不可いと云つて、二度も三度も追ひ返すと、終局には對手も飽きて來なくなる。それでも強情に押掛けて來る奴には、

先づ筋彫をすると云つて、人物や花鳥の輪廓を太い線で描く。その場合には故意に太い針を用ひて、精々痛むやうにちくちくと肉を刺すんだから堪らない。大抵の者は泣いて了ふ。縦令ば歯を食縛つて堪へても身體の方が承知しないで、必然熱が發る、五六日は苦む。これで大抵の者は降參して了ふんだ。

源七も此の流儀で、味淋の氣があるを口實にして、一旦は先づ體好く清吉を追ひ返した。が、中々この位のことでは諦めるのでは無い。明る日も其の明る日も毎日々々根好く押掛けて來るので、源七老爺も終局には此方が根負をして了つて、それほど執心ならば兎も角も彫つて見ませうといふことになつたんだ。

そこで源七は先づ筋彫にかゝつた。一體何を彫るのかと云つて雛形の手本を見せると、清吉は『嵯峨や御室』の光國と瀧夜叉を彫つて呉れと云

つた。同じ刺青でも二人立と來ては大仕事だよ。殊に瀧夜叉は傾城の姿だから、手数が中々費るさうだ。無論、手間賃は幾許でも可いと云ふんだが、この男の瘦せた生白い脊中に、それほど手の込んだ二人立が乗る譯のものぢやあないんだ。もう些と軽いものと色々勧めたんだが、清吉は何うしても肯かない。是非とも『嵯峨や御室』を頼むと強情を張るので、源七は又弱らせられた。

が、後で考へて見ると、それにも一應理窟のあることで、例のお金は一昨年の御祭禮に踊屋臺に出た。それが右の『嵯峨や御室』で、お金は瀧夜叉を勤めて大層評判が好かつたんださうだ。然う云ふ因縁があるので、清吉は自分の脊中にも是非その瀧夜叉を彫つて貰ひたいと望んだ譯だ。

源七もいよく根負がして、まあ何でも可い、當人の希望通りに瀧夜

又でも光國でも彫ることにして、例の筋彫で懲りさして了はうと云ふ料  
見で、先づ下繪に取かゝつた。それから例の太い針でちくちくと突つ付  
き始めたが、清吉は眼を瞑つて、齒を食ひ縛つて、じつと我慢をしてゐ  
た。痛むかと訊いても、痛くないと答へた。が、何しろ無理な仕事をす  
るんだから、強情や我慢ばかりで押通せる譯のものでない。半月も経な  
い中に幾度も甚い熱が出て、清吉は殆ど半病人のやうになつて了つたが、  
それでも根好く通つて來た。

當人の親達も大變心配して、そんな無理をすると身體に障るだらうと  
度々意見をしたんだが、清吉は何うしても肯かない。例の通り、死んで  
も關はないと強情を張通してゐるんだから、周圍の者も手を着けること  
が能ない。親達も店の者も唯心配しながら日を送つてゐる中に、清吉は  
漸々に弱つて來た。顔の色は眞蒼になつて來た。今年十九の若い者が杖

をついて歩くやうになつた。それでも毎日缺さず通つて來るので、源七  
は其の強情に驚くと云ふよりも、寧ろ可哀想になつて來た。此上に續け  
て彫つてゐれば、どうしても死ぬより他は無いなだ。最初から既う一月  
の餘になるが、瀧夜叉の全身の筋彫がやうく出來上つたぐらゐのもの  
で、之から光國の筋彫を濟まして、更に本當の色ざしを終るまでには、  
幾日費るか判つたものぢやあない。清吉がその總仕上まで生きてゐられ  
ないことは知れ切つてゐるんだ。

何とかして此處らで思ひ切らしたものだ、源七も色々に考へてゐ  
た。何でも冬の半で、曇交りの寒い雨が降る日だつたさうだ。清吉は既  
う歩く元氣もない、殊に雨が降つてゐる故であらう、自分の家の駕籠に  
乗せられて源七の家へ來た。何ほ何でも既う見では居られないので、半  
分死んでゐるやうな清吉に對つて、私は醫師ではないから、他の身體の

ことは能く判らないが、多年の商賣の経験で大抵の推量は付く。お前さんが此上無理に刺青をすれば、何うしても死ぬに決つてゐるが、それでも關はずに遣る意か、何うだと云つて、噛んで啣めるやうに意見をすると、當人も既う大抵覺悟してゐたと見えて、今度は餘り強情を張らなかつた。

この時に清吉は初めて彼のお金の一條を打明けて、自分は何うしても此の身體に刺青をして、梅の井の奴等に見せて與らうと思つたんだが、それも既う能さうもない。瀧夜叉も光國も出來上らない中に死んで了ふらしい。就ては「嵯峨や御室」の方は中止して、左の腕に位牌、右の腕に石塔を彫つて貰ひたいと、寔れた顔に涙を零して頼んださうだ。源七老爺も「其時には私も泣きましたよ。」と私に話した。

どうで死ぬと覺悟してゐる人の依頼だから、源七も否とは云はなかつ

た。其後も清吉は駕籠で通つて來た。源七も一生懸命の腕を揮つて、位牌と石塔を彫つた。それが漸く出來上ると、清吉は大變に喜んで、厚く禮を云つて歸つたが、其晩に死んだ。

初島の家から報せて遣ると、梅の井のお金も阿母も駈けて來た。今更泣いても謝つても追付く譯のものぢやあない。

菩提寺の和尚様は筆を執つて、佛の左右の腕に彫られてある位牌と石塔とに戒名を書いて與つた。



補増 雨月物語

この脚本二幕は上田秋成の『雨月物語』の中に見えたる『浅茅ヶ宿』の一篇より  
 材を取りたるものにて、上の巻は全く予が創意に出づ。下の巻も舞臺上の都合に  
 て改作したる點も尠からず。さればこそ増補の二字を冠せつ。

登場人名

|       |      |       |      |
|-------|------|-------|------|
| 絹商人   | 勝四郎  | 同     | 山口平馬 |
| 勝四郎の妻 | 宮木   | 小姓    | 犬稚   |
| 大内の公達 | 龍王丸  | 大内の侍女 | 小雪   |
| 大内の家臣 | 萩野七郎 | 荷持の男  | 重助   |

|       |    |      |    |
|-------|----|------|----|
| 真間の里人 | 佐市 | 同    | 白縫 |
| 佐市の娘  | お  | 同    | 八島 |
| 歌占の女  | 入江 | 秃    | 千鳥 |
| 赤間の遊女 | 浪路 | 旅の女房 | お  |
| 同     | 同  | 同    | お  |
| 同     | 同  | 同    | お  |
| 同     | 同  | 同    | お  |

上の巻

足利時代の末、三月廿四日。

長門國赤間關の海濱。正面より上の方には阿彌陀寺の丘陵を望み、中央より下の方は海を  
 隔て、大里の濱を見る。同じく下の方に葎養張の茶店ありて、よき所に庄几二脚を置く。  
 所々に櫻の立木あり。  
 (旅の女房お豊、同じく娘お袖、いづれも旅装束にて庄几に腰をかけ、茶店の娘お仙は茶

を汲んで出づ。

お仙。お茶一つ召上りませ。

お豊。よい鹽梅に天氣が續きます喃。

お仙。兎かく此頃は雨や風の多い時節でござりますが、誠に好い日和續きで結構でござりまする。

お袖。こゝらは大層賑かい様でござりまするが、何ぞ御祭禮でもあるのでござりまするか。

お仙。お前様方は旅のお方で、御存知ないは御道理でござりまするが、今日は三月の廿四日で、先帝祭の御當日でござりまする。

お豊。成ほど今日は三月の廿四日、噂に聞いた赤間ヶ關の先帝祭でござりまするか。道理で町中が大層賑かなことぢやと思つてゐました。

お仙。もう一足早くお出でなされたら、太夫さん達の行列が觀られました

ものを、惜いことをなされました。今年も例年の通り、太夫さん達は五つ衣に緋の袴といふ官女の扮装で、それはそれは見事なことです。りました。

お袖。それは残念なことをしました喃。

(二人は茶を飲んでゐる。下の方より下總の絹商人勝四郎、三十二歳、暫く此地に逗留しゐたる體にて、旅中ながらも打寛ぎたる扮装にて出づ。)

お仙。お休みなされませ。

勝四郎。あゝ、お仙女郎か。いつもく店は繁昌ぢやな。

(勝四郎も床几に腰をかける。)

勝四郎。此の土地の名物といふ先帝祭も、朝から好い天氣で仕合でござつた喃。(お豊等に對ひ。)お前様方も行列を御覽なされましたか。

お豊。今も其の噂をしてゐた所でござりましたが、一足違ひで見失りました。



お仙。あい。一際目立つて美しう見えました。

勝四郎。お前にも美しう見えたか。いや、有難い喃。

お仙。おほい、い、い、い。

お豊。ほんに氣輕で面白いお人ぢや。風俗といひ、詞の訛では上方のお人でも無さ想な。鎌倉あたりのお生れでござりまするか。

勝四郎。お察しの通り。關東育ちには相違ござりませぬが、鎌倉とはずつと懸離れた下總は葛飾の郡、真間の里に生れた者でござりまする。

お袖。下總の真間といふのは、手兒奈の舊蹟のある所ではござりませぬか。勝四郎。よう御存知ぢや。即ち手兒奈の舊蹟で、祠もあれば繼橋もあり。

歌を詠む人には御馴染の所なれど、いやもう草深い田舎でござりまする。お通り懸りの節には些と御立寄り下さります。と申した所で、わたくしも旅から旅を流れ渡る商人、何時我家へ歸らうやら判りませぬ。

先づこゝをわたくしの宅と思召して、お茶なとゆるくと召し上りませ。せ。

お袖。ほんにおどけた事ばかり云ふお人ぢや。

お豊。さうして旅から旅を歩いてお出でなされたら、さぞ面白いことござりませうな。(空を見る)どれ、わたし等は暮れぬ中に行きませうか。

勝四郎。もう御立でござりまするか。

お袖。どうも失禮をいたしました。

お豊。お先へ御免下さります。

(お豊は勝四郎に會釋しつゝ、店口へ行って茶代を置く。)

お仙。ありがたうござりまする。又お歸りにお寄り下さります。

お豊。大きにお邪魔をしました。さあ、來や。

お袖。あい、あい。

(お豊お袖は上の方へ去る。勝四郎は後を見送る。)

勝四郎。私が調子に乗つてべら／＼と饒舌るので、あの人達も呆れてゐた様子ぢや。は／＼／＼／＼。(海を望む。) あゝ、春の海は平穩に晴れて、青い浪の間に白帆の影や鷗の聲……。斯ういふ處に悠々遊んでゐると、人間の苦勞といふことを忘れて、気が暢々する喃。

(お仙が汲んで出す茶を飲み、勝四郎は海の景色を飽かず眺めてゐる。上の方より大内の家臣萩野七郎、廿二三歳、風流なる扮装にて笠を被り、荷持男重助の襟髪を取りて出づ。後より小姓一人附添ひ出づ。)

重助。あゝ、もし、御免下さりませ。

七郎。往來にて武士の足を踏みながら、挨拶もせず逃るとは無禮な奴ぢや。

勝四郎。や、貴様は重助ぢやないか。

重助。あゝ、旦那殿……。どうぞ此のお武家様に御詫びなされて下さりませ。

せ。

(勝四郎怖る／＼進み出づ。)

勝四郎。恐れながら申し上げます。それなるは私の奉公人、何のやうな疎勿を致しましたかは存じませぬが、私が代つて幾重にも御詫を申上げますれば、何うぞ御料見下さりませ。

七郎。では、這奴はお身の家來か。

勝四郎。左様でござりまする。平生から我殺の疎忽者でござりますれば定めて重々の御無禮を働きましたでもござりませうが、私からも屹度叱り置きますれば、今日の所は何分にも……。

七郎。今日は赤間の先帝祭、遊女の行列を見物せんとして、忍び編笠に面を隠し、阿彌陀寺へ詣りし下向路に、這奴うろ／＼來かゝりて、土足で絶かに踏んだるのみか、一言の挨拶もせず立去らんとするは、餘りに

禮儀を知らぬ奴、以後の懲戒に引立て、參つたのぢや。

重助。美しい太夫達が行くもあれば歸るもあり。その艶かなのに見惚れてゐる中に、つい疎匆でお前様の御草履を踏みました。見れば立派な御武家様、何のやうな御咎を受けやうも知れぬと御挨拶も致さずに逃げましたは、わたくしが重々の不調法、眞平御免下さりませ。

勝四郎。どうぞ御勘辨を願ひます。

七郎。よい、よい。主人までが口を添へて詫ぶるとあれば、今日の所は先づ免して置くぞ。

(襟髪を取つて突き放せば、重助踉蹌して倒れんとするを、勝四郎慌て、抱き止る。)

勝四郎。格別の思召、ありがたう存じます。

重助。へい、へい。ありがたうござりまする。

(二人は禮を云ふ。七郎は笠をぬぎて床几にかゝる。)

お仙。お出でなされませ。

(お仙は茶を汲んで出す。七郎は徐に扇をつかひながら四邊を眺める。)

七郎。どうぢや、犬稚。(小姓を見かへる。)今日は美しいものを見たであらうな。

小姓。聞きしに勝る賑ひでござりました。

勝四郎。では、お前様方も太夫の行列を御覧なされましたか。

七郎。お、目も醒むるばかりに華やかなものであつた。左布流が媚は萬葉集に残り、長柄が妍は忠見の集にも止めたれど、それは見ぬ世の傀儡女ぢや。今眼のあたりに此の光景を見るからは、暮れ行く春も榮ありて、何れか櫻ならぬはない。武士の魂も蕩くるわは、は、は、は。

勝四郎。御道理でござりまする。お歴々のお前様方さへ左様に仰せられまするものを、況て我々共が魂の置所を忘れてうかくと浮れ出すの

も無理はござりませぬ。何をお隠し申しませう。わたくしは關東の足利絹を商うて、旅から旅を渡つて歩く者でござりますが、京は好い所と聞きましたので、澤山の代物を仕入れ、これなる男を伴に連れて、はるく上洛いたしますると、見ると聞くとは大きな相違で、彼の應仁の軍以來、九重の都といふも名ばかりで、大路小路は見る影もなく荒果てました。喃、重助。

重助。今でも軍の沙汰は止まず、やれ細川の、三好の、畠山のと、毎日互ひに唾み合うて、行く先々で切ツつ拂ツつ、うかくしてゐたら何んな傍杖を受けうも知れぬと、命からく浪華へ下りましたが、こゝも都に近いので、思はしい商賣もござりませず、又ぞろ中國筋へ流れ渡りました。

勝四郎。其中に人の噂を聞けば、周防長門は大内様の御領分でこゝらには

軍の沙汰もなく、都にもおさく劣らぬ繁昌と承はりましたので、播磨路から備前備後を越えて、やうく御當地へ参りますると、何さま聞きしに勝る家の作り、人の風俗、町の賑ひ、廓の繁昌、中國の果にも斯んな好い處があるのかと、實に吃驚いたしました。例へて申せば地獄から極樂へ引越したやうなもので、商賣物はどんく賣れる。面白い遊び場所は澤山ある。それや是やで歸るを忘れて、昨年十月から半年ほどもうかくと長逗留を致して居ります。

重助。わたくし共も極樂のやうな此の土地へ來たお庇で、やうく命の洗濯を致しました。

七郎。はい、極樂のやうぢやと申すか。他國の者には左程の好い土地と見ゆるか喃。(少しく誇りがに打笑みて。)それがしは大内家譜代の家來、幼少の頃より山口に育つて此の赤間ヶ關へも折々に遊びにまゐるが、流石

に昔より船着の場所だけあつて、出船入船で晝夜の賑ひ、先づは繁昌の土地と申して可からうな。

勝四郎。誰しも一口に京難波津と申しますが、わたくし共の見ます所では、京や浪華にも優したる繁昌、これも御領主大内様の御威勢と、唯々恐れ入つて居ります。

七郎。それがしの口から申すも如何ぢやが、先づ當時中國は云ふに及ばず、四國九州に亘つて、富といひ、力といひ、御當家と肩をならふる者はあるまい。

重助。其の御内の方に對して、無禮を働きましたるは、いよく以て恐れ入つた儀で、何とも申譯がござりませぬ。

(お仙は上の方を見る。)

お仙。あれ、あれ、御覽じませ。御祭から戻りの太夫さん達が、五人六人

打揃うて、此方へ練つて來られます。

七郎。何さま遊女の一群が打連れてこれへ參るわ。

小姓。あゝ、あの中には入江殿も見えます。

七郎。何、入江が見ゆるか。

(七郎思はず起ち上る。)

重助。あゝ、浪路どのも見えます。

勝四郎。え、浪路が來たか。

(勝四郎は思はず起つて上手へ行きかゝり、七郎に突き當りて、互に顔を見合せる。)

二人。はゝゝゝゝ。

(上の方より赤間の遊女入江、浪路、刈藻、磯萩、白纒、八島の六人、いづれも官女の姿にて出づ。禿千鳥も跡より出づ。)

入江。あゝ、七郎どの。これにござんしたか。



七郎。先刻からお身達の歸るをこゝに待つてゐたのぢや。  
刈藻。そりや嘘でござんせう。

白縫。お前の口には油断がなりませぬ。

(勝四郎は袂かに手招きすれば、浪路は首肯きてその傍に来る。磯萩も八島もつづいて来る。)

浪路。お前もこゝに待つてゐて下さんしたのか。

勝四郎。待つてゐたとも、待つてゐたとも、此の首が千切るゝほどに長く  
伸して、先刻から一時も待つてゐたのぢや。

磯萩。わたし等もお前に見せうと、今日は此のやうに扮装つて出ましたぞ。  
七郎。いや、遊女には手管とやらがある。町人、必ず氣を許すなよ。

勝四郎。どう致しまして……。わたくしが馴染の女に限りましては、そんな詐り者は一人もござりませぬ。

八島。其の眞實に打込んで、浪路さんは明けても暮れてもお前の噂ばかり……。

重助。こりや何うやら當にならぬぞ。

勝四郎。え、貴様の知つた事か、黙つてゐる。

七郎。いや、面白うなつて來た喃。廓の遊びには武士も町人も區別はある  
まい。斯う見た所が氣輕さうな男共ぢや。今宵は某と一所に飲まぬ  
か。どうぢや。

重助。それは誠にはや有難い儀で……。

勝四郎。え、又差出るか、引込んでゐると云ふに……。折角の仰せでは  
ござりまするが、わたくしは些と其、他に約束がござりまして……。

浪路。ほんに此のお人は、今夜わたしの許へ來る約束があります。他へ  
滅多に遣ることではござんせぬ。

勝四郎。此の通りの色男、御覽下さりませ。

七郎。成程喃。

磯菰。(重助に對ひて。) 猛將の下に弱卒無しとやら、過日太平記讀みから聞い

たことがある。

八島。旦那殿が此の通りなら、お前も定めて色男でござんせうな。

重助。勿論、勿論、これでも故郷の下總では、女を七人ばかり殺した男ぢ

や。何と凄いことであらうがな。

入江。(七郎に對ひて。) もし、七郎殿。あちらにばかり勝手に物云はせて、お

前は黙つてゐさんすのか。

刈藻。お前もこゝで負けぬやうに、入江さんとの戀物語でも爲なさんせ。

白縫。他國の人に云ひ負かされては、お國のお武士の耻になりますぞや。

七郎。はて、措いて呉れ、それがしの風流は誰も承知の上ぢや。今更こゝ

で事新しう云ふには及ばぬ。喃、犬稚。

小姓。左様でござりまする。先づ此の赤間ヶ關で名高いものは、第一が阿

彌陀寺の御陵、第二が龜山の八幡宮、それに次いででは廓に比びなき殿

の御全盛でござりまする。

勝四郎。これは又偉いことを云ひ出したものぢや。はゝゝゝゝ。

遊女六人。ほゝゝゝゝ。

(皆々笑ふ。下の方より歌占の女、片手に笠を持ち、片手に短冊あまた着けたる  
枝を持ち出て。) 枝を持ち出て。

浪路。あゝ、いつもの歌占が來た。

入江。呼んで見やうではござんせぬか。

歌占。歌占の御所望はござりませぬか。神の心は歌に現はれまするぞ。(七

郎等に對ひて。) 不知火の筑紫の事も問ひ給へ。(勝四郎等に對ひて。) よしあし

の浪花の事も問ひ給へ。如何でござりまするな。

浪路。わたし等は度々のことで珍らしうもない。(勝四郎に對ひて。)お前、占うて貰ひなさんせ。

入江。お前も何うでござんすな。

七郎。何さま其れも一時の興ぢや。さらば歌占、先づそれがしから占うて呉りやれ。

歌占。はい、はい。かしてまりました。

(女は笠を指きて跪づき、持つたる杖をうやくしく押頂きて、二三度打振り、更に七郎の前に進む。)

歌占。天地の神々を心に念じ、眼を瞑ぢてお引き下さりませ。  
七郎。よし、よし。

(七郎は眼を瞑ぢて一枚の短冊を引く。女は取つて見る。)

歌占。翌ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは。(讀み終りて。)こ

れは昔から誰も知る名高い歌、改めて申上ぐるまでもござりませぬ。

刈藻。翌ありと思ふ心の仇櫻。

白縫。夜半に嵐の吹かぬものかは。

歌占。何事も御用心が肝要でござりまする。

重助。餘り好い辻占でも無いやうぢやな。

勝四郎。では、今度は私が引くぞ。

歌占。は、は。

(女は進んで勝四郎の前に行く。勝四郎も眼を瞑ぢて短冊を引く。)

浪路。はて、何とござんしたえ。

歌占。契り置きしさせもの露を命にて、あはれ今年の秋も往ぬめり。(讀み終りて。)これも百人一首で何人も御存知の歌でござりまする。

勝四郎。して、其譯は……。

歌占。誓ひし詞を頼みにして、今年こそはと待つに甲斐なく、秋は過ぎても便りは無し……。 (勝四郎の顔を見る。) お前は人に待たる、身ではござりませぬか。

勝四郎。何、人に待たる、身とは……。

重助。はてな。(考へる。) いや、判つた。これは故郷の真間のお宿で……。

勝四郎。あゝ、待て、待て。これはそんなことでは無い。おゝ、それ、それ、こゝに居る太夫が日頃から私の來るのを待つてゐると云ふ事であらう。

重助。成ほど然うかも知れませぬ。

七郎どうぢや。そちらの占方は……。

勝四郎。先づ善いと致して置きませうか。

七郎。兎も角も價を取らずぞ。彼の町人の分も一所に取つて呉りやれ。

(七郎は錢を與る。)

歌占。ありがたうござりまする。

(女は錢を受取りて徐に去る。風吹きて櫻の花はらくと散りかゝる。)

小姓。殿、御覽じませ。櫻の花が蝶のやうに、ひら／＼と舞うて落ちまする。

七郎。翌ありと思ふ心の仇櫻ぢや。どうやら夕風が薄寒うなつて來た喃。

入江。ほんに風が寒うなつて來ました。

浪路。春の日は長いやうでも既に暮れかゝる。

刈藻。廊でも旋て火を點す頃であらう。

磯萩。どれ、わたし等は一足先へ行きませうか。

白縫。七郎どの、後から必然來なさんせ。

八島。勝四郎どのも待つてゐますぞ。

七郎。わしも直に後から行かう程に、座敷を清めて待つてゐやれ。

勝四郎。わしも一旦宿へ歸つて、直に出直して行くと爲やうよ。

入江。(七郎に對ひて。) 其約束を忘れさんすな。

七郎。よし、よし。

浪路。(勝四郎に對ひて。) 今夜は面白いこととして遊びませうぞ。

勝四郎。さうぢや、さうぢや。

刈藁。では、お先へ……。

六人。行きませうぞえ。

(遊女六人は禿を伴ひて下の方へ歩み去る。)

小姓。殿、お前様も既うお越しなされませぬか。

七郎。あゝ、そちも廓へ早う行つて見たいか。はゝゝゝ。

(七郎徐に起たんとする時、大内の家臣山口平馬、小具足の上に蓑笠を着けて出づ。)

平馬。あゝ、七郎どの。これにござりましたか。

七郎。お身は山口平馬でないか。威めしい扮装で何しにこゝへ……。

平馬。うかくしてゐる時節でござらぬ。お家の大變を御存知ないか。

七郎。何、大變とは……。

平馬。陶權頭晴賢入道、俄に謀叛を企て、一昨日の夕六つ頃、山口の御

屋形へ攻めかけました。

七郎。陶晴賢の謀叛とは……して、御主君には何とせられた。

平馬。宿直の面々は僅に五十餘人、必死となつて防げども、敵は眼に餘る

大軍にて、加之も屋形へ火を掛たれば、物の半時とも堪え難く、矢種

残らず射盡して、御主君は渦巻く烟の中に御生害、其餘の人々も思ひ思

ひに討死して、流石結構を凝らせし御屋形も、一夜の中に灰燼となつて失せ申した。

七郎。して、御臺や公達は……。

平馬。右御二方の行方知れねば、我々は斯様に人目を忍んで所々方々をお尋ね申して居る所ぢや。心も急げばこれにてお別れ申す。御免。

(云ひ捨て、平馬は早々に去る。七郎は呆れて後を見送る。)

七郎。思ひも寄らぬお家の大變……。

小姓。誠に夢のやうでござりまするな。

七郎。謀叛人に御家を亡ぼされて、歸るに家無き身となつたわ。

勝四郎。こりや飛んでもない事になりました喃。

七郎。廓の酒の醒めぬ間に、歡樂の夢は忽ち醒めた。

勝四郎。極樂ぢやと思つてうか、油断してゐたら、こゝも矢張り地獄で

あつたか。

(七郎と勝四郎は茫然たり。風吹きて、櫻の花又もや散りかゝる。)

重助。戀と無常の早替りは、餘り飽氣ないこととござりまする喃。

(重助も嘆息す。勝四郎も嘆息して腕を拱む。)

七郎。兎にも角にも猶豫はならぬ。宿へ歸つて仕度を整へ、一先づ山口へ引返して、其後の成行を見ると致さう。犬稚、參れ。

小姓。はッ。

勝四郎。では、お立でござりまするか。

七郎。あゝ、町人。命があらば重ねて逢はう。

(七郎は小姓を連れて、上の方へ急ぎ去る。勝四郎は又もやじつとなりて腕を拱む。)

重助。あの御武家は餘り慌てたので、茶代も置かずに行つて了うた。

お仙。毎度御最負になつたお客様でござりますれば、僅少のお茶代などは

何うでも宜しうござりますが、大内の御家が滅亡とは、飛んでもない大變でござりまするな。

重助。中國四國九州に威勢を振つた大内の御家も、一夜の中に亡びるとは、脆いとも果敢ないとも云ひ様のない始末ぢや。もし、旦那殿。何をうっかりと考へてゐるのでござりまする。

(勝四郎答へず、程もじつと俯向きゐる。)

重助。もし、もし、旦那どの。何うなされたのでござりまする。旦那……

旦那殿……。

勝四郎。はて、騒々しい奴ぢや。今の話を聞いたので、私は俄に氣合が悪うなつて來た。

重助。それは困つたものでござりまするな。では、此の茶店の奥へ入つて、氣注の薬でもお飲みなされませ。

お仙。まあ、奥へ行つて些との間お休みなされませ。

勝四郎。然う爲やうか喃。

重助。さあ、お出でなされませ。

(重助とお仙は勝四郎を連れて、茶店の奥に入る。上の方より大内家の侍女小雪、旅姿にて笠を持ち、腰に小刀を佩び、大内の公達龍王丸を守護して出づ。)

小雪。こゝまで無事に落ち延びて参りますれば、追手のかゝる氣配ひもござりまするまい。暫くこゝで御休息遊ばしませ。

(小雪に龍王丸を勦りて床几に掛けさせる。)

龍王。こゝは何といふ處ぢや、

小雪。こゝは赤間ヶ關でござりまする。これから便船を求めて九州へ落ちますれば、御運の開けるは瞬く間でござりませう程に、必ず御案じなされまするな。

龍王。陶の入道めは憎い奴ぢや喃。

小雪。おゝ、憎い奴でござりまする。亂れたる世とは申しながら、重代相恩の御主君を攻め亡ぼし、己が代つて世を取らうとは、獸にも劣つた人非人でござりまする。

(下の方より以前の山口平馬窺ひ出づ。)

平馬。小雪どの、不思議な所でお目にかゝつた。して、御臺様は……。

小雪。申上ぐるも涙の種……。屋形を抜けて落つる途中、お悼はしや御臺様には、流れ矢に中つて敢ない御最期……。

平馬。すりや御臺様には御最期とな。して、お身達の行く先は。

小雪。確と定つた的もなければ、兎にも角にも向地へ……。

平馬。九州へか。いや、それは危い。それがし御案内申上るほどに、矢はり陸地を歩ませられい。

小雪。して、其の落着く先は……。

平馬。陶入道殿の御屋形へ……。

小雪。え。扱はそなたも謀叛の黨か。

平馬。(冷笑ふ。)推量の通り、われ等も陶殿に加擔して、謀叛の徒黨に加はりし一人。行方知れざる御臺所や公達を探し出して手柄にせうと、こゝらあたりに網を張つてゐたのぢや。女子のお身に用はない。公達を渡して勝手に行かれい。

小雪。えゝ、不忠不義の山口平馬、汝等如き犬侍に、大事の公達を渡してならうか。

平馬。渡さぬとて其儘に免さうか。敵對して後悔せられな。

小雪。何を……。

(平馬は進んで龍王丸を引立行かんとす。小雪は遮りて小刀を抜く。平馬も太刀



をぬきて闘ひ、双方ともに傷つきしが、小雪は遂に斬倒さる。萩野七郎は衣服の下に籠手を着け、袴を括りて脛當を穿き、小姓は袴を括りて素足になり、何れも旅装束にて走り出づ。斯くと見るより小姓は龍王丸を圍ひ、七郎は太刀をぬきて平馬に斬つて蒐る。平馬闘つて遂に斬伏せらる。

七郎。犬稚。兎も角も公達をあれへ御伴ひ申せ。

小姓。はッ。先づ斯うお出でなされませ。

(小姓は龍王丸の手を曳きて、上の方へ走り去る。七郎は小雪を抱え起して、耳に口を寄せる。)

七郎。小雪どの、心を確に持たれい。小雪……小雪どの……平馬は七郎が討取つたぞ。

(小雪は漸く眼を睜く。)

小雪。あゝ、七郎どの……公達は……。

七郎。公達はそれがしが確に守護いたした。さるにても傷は浅い、必ず弱

るな、氣を落すまいぞ。

小雪。あい。(云ひつゝ又弱る。)

(茶店の中より勝四郎は茶碗を持ちて窺ひ出づ。)

勝四郎。もし、氣注のお薬はわたくしが此に持つて居ります。兎も角も

これを……。

七郎。あゝ、忝けない。

(七郎は茶碗を受取りて小雪の口に啣ませる。小雪は七郎の手に縋る。)

小雪。七郎どの……。未來は……。未來は……。

七郎。あゝ、云ふまでもないこと。お身と我とは豫て許嫁の約束もある仲……。遊興に耽りて主家の大變にも在合はさず、剩へ未來の妻をも救ひ得ぬ……七郎の罪は悔んで返らぬ。免して下され。

小雪。たとひ此世に縁は無くとも……。

をぬきて闘ひ、双方ともに傷つきしが、小雪は遂に斬倒さる。萩野七郎は衣服の下に籠手を着け、袴を括りて脛當を穿き、小姓は袴を括りて素足になり、何れも旅装束にて走り出づ。斯く見えるより小姓は龍王丸を圍ひ、七郎は太刀をぬきて平馬に斬つて蒐る。平馬闘つて遂に斬伏せらる。

七郎。犬稚。兎も角も公達をあれへ御伴ひ申せ。

小姓。はッ。先づ斯う出でなされませ。

(小姓は龍王丸の手を曳きて、上の方へ走り去る。七郎は小雪を抱え起して、耳に口を寄せる。)

七郎。小雪どの、心を確に持たれい。小雪……小雪どの……。平馬は七郎が討取つたぞ。

(小雪は漸く眼を睜く。)

小雪。あゝ、七郎どの……公達は……。

七郎。公達はそれがしが確に守護いたした。さるにても傷は浅い、必ず弱

るな、氣を落すまいぞ。

小雪。あい。(云ひつゝ又弱る。)

(茶店の中より勝四郎は茶碗を持ちて窺ひ出づ。)

勝四郎。もし、氣注のお薬はわたくしが此に持つて居ります。兎も角もこれを……。

七郎。あゝ、忝けない。

(七郎は茶碗を受取りて小雪の口に啣ませる。小雪は七郎の手に縋る。)

小雪。七郎どの……。未來は……。未來は……。

七郎。あゝ、云ふまでもないこと。お身と我とは豫て許嫁の約束もある仲

……。遊興に耽りて主家の大變にも在合はさず、剩へ未來の妻をも救ひ得ぬ……七郎の罪は悔んで返らぬ。免して下され。

小雪。たとひ此世に縁は無くとも……。

七郎。未來は必ず女夫でござるぞ。

小雪。おゝ。

(小雪は苦しき中にも笑を含み、七郎の手に縋りつゝ又倒る。七郎は挫乎と坐して悲嘆の涙に咽ぶ。勝四郎も涙を拭ふ。)

勝四郎。もう御手當の見込もござりませぬか。

七郎。傷は急所ぢや。(頭を掉る。)今も聞く通り、此女はそれがしが許嫁の女

子ぢや。切ては亡骸の始末をと思へども、心が急げば其れも叶はぬ。

近頃迷惑な儀ではあらうが、お身頼まれては呉れまいか。

勝四郎。よろしうござりまする。萬事はわたくしが引受けて、このお女中

の亡骸は、然るべき様に取片附けまする。

七郎。それ承はつて安堵いたした。何はあれ、人目に立たぬ所へ……。

(七郎は小雪の死骸を抱え起せば、勝四郎も手傳ひて背後の木かげに運び入れ、

兩人合掌す。)

七郎。さらば町人、頼んだぞ。

勝四郎。必ず御心配なされますな。

七郎。ひい。

(七郎行きかけて又もや死骸の方を見かへり、勝四郎と顔を見合せて兩人黙然。七郎は涙を拂ひつゝ去る。茶店の中より重助とお仙出づ。)

重助。山口で軍騒ぎがあつたと聞いてゐる中に、こゝでも切合が始まると

は、いや物騒な事でござりまするな。

お仙。わたくしも先刻から何なる事かと案じて居りました。

(櫻の花頬に散る。)

勝四郎。旅から旅を漂泊うて、其日々々をうかく暮してゐたが、何處へ行つても修羅の巷には飽き果てた。先刻あの歌占の云ふたに嘘はない。遠い故郷には私を待つてゐる人があるのぢや。(獨語のやうに云ふ。)

(下の方より以前の禿千鳥出づ。)

千鳥。もし、勝四郎どの、浪路さんが先刻から待つて居やんすぞえ。私と一所に、さあ御座んせ。

(千鳥は勝四郎の袂を取る。勝四郎は曳かれて一足踏踏きしが、徐に其袂を拂ふ。)

勝四郎。いや、私は既う歸るのぢや。

千鳥。歸るとは何處へ……。

勝四郎。遠い故郷へ歸るのぢや。

重助。え。

(重助は怪みて勝四郎の顔を見る。勝四郎は腕を拱みて暮れ行く空を仰ぐ。櫻の花亂れ落ちて、夕暮の鐘遠く聞ゆ。)

### 下の巻

下總國葛飾の郡真間の里。二重家體の古き家は荒れに荒れて、茅の軒は傾き、竹

の縁は朽ちたり。入口には破れたる竹の門ありて、庭にも外にも秋草おどろに生茂れり。門の外には松の大樹あり。

同じ年の秋の初にて、日も已に暮れ果てたる頃。

(勝四郎は旅姿にて笠を持ち出て出づ。夕月の光に四邊を見廻はして立つ。)

勝四郎。あゝ、こゝぢや、こゝぢや。この松の大木が碓に目標……とは云へ、家の状も思ひの外に荒れ果て、人が住んで居る様にも見えぬ。若や空屋になつて了つたのではあるまいかな。(覺東なげに内を覗く。)もし、御免なされませ。何人も居らぬか。御免なされ。頼みまする。

(門の外より音なへば、奥より勝四郎の女房宮木、二十五六歳、色蒼さめて姿整れたるが、襟に結びたる髪を長く垂れて出づ。)

宮木。何人でござりまするな。

勝四郎。絹商人勝四郎の宿はこれにてござりましたな。

宮木。左様でござりまする。して、お前様は……。

勝四郎。然ういふ聲は……。

(双方互に透し視る。)

勝四郎。お、女房ぢやないか。

宮木。え。(思はず縁より降りる。)お、勝四郎どのか。

勝四郎。其の勝四郎が今戻つたのぢや。

宮木。お、戻られたか。

(宮木は走り出す。勝四郎も門も押倒して走り入り、夫婦は取纏りて少時詞も無かりしが、宮木は涙を拭ひて云ふ。)

宮木。ようまあ戻つて来て下されましたな。

勝四郎。商賣の爲に旅から旅を漂泊うても、こゝは我家ぢや。戻らいで何とせうぞ。お前に變ることも無かつたか。

(優しく問へは、宮木は唯さめくと泣く。)

勝四郎。はて、斯うして無事に邂逅ふからは、泣くことも嘆くことも何にも無い。委しい事はゆるく話さう。兎も角も洗足の水を持つて来て呉りやれ。

宮木。あい。

(宮木は上の方の奥に行く。こゝには土饅頭を築きて、新しき卒塔婆を立て、阿伽桶には白桔梗の花を挿したり。宮木は花を抜きて縁先に置き、阿伽桶を持ち来る。勝四郎は縁に腰をかけて草鞋をぬぎ、足を洗ひつゝ更に四邊を見廻す。)

勝四郎。私がかゝの家を去つてから、數へて見れば足掛け七年になるが、暫く見ぬ中に甚く荒れた喃。狐狸の棲家も同様ぢや。

宮木。主人の無い家には狐も狸も棲みまする。斯うした破ら家に女子一人で、七年の月日を住み侘びた、悲し心細さを察して下され。

(宮木又泣く。勝四郎は面目なげに頭を掻く。)

勝四郎。その恨は道理ぢやが、私の方にも又色々の仔細がある。(又もや家内を見廻はす。) 何しろ最う日が暮れたに、燈火の用意は何うぢやな。

(云ひつゝ縁に上りて坐を占むれば、宮木は桶の水を捨て、これも内に入る。庭には蟲の聲。)

宮木。此のあたりは四年前から軍の騒ぎで、住む人も四方へ皆散落、里は寂れ、田は荒れて、こゝ二里や三里の間には油を賣る家もござりませぬ。月のある夜は月明を便宜にし、暗き夜は暗きがまゝに、明るを待つて居ります。

勝四郎。それは定めて不自由なことであらう喃。幸ひ今宵は月が明るい。庭に啣く蟲の音を聴きながら、軒洩る月を燈火として、一夜を語り明かすも風流ぢや。さて斯うして久振で逢うて見ると、云ひたいことも數々ある。先づ何から話して可からうぞ。

宮木。妾とても云ひたい事は山ほどあれど、まあ、お前から先へ聞かして下され。

勝四郎。女房、堪忍して呉れ。故郷のこともお前のことも、實は今まで忘れてゐたのぢや。

宮木。え。

勝四郎。と云ふたら、定めて不實な男と恨みもせうが、東も先年から兵亂ついで、思はしい商賣も無いまゝに、こりや寧ろ花の都へ押上つて、幾層倍の儲けを見るが優ぢやと、田畑をも賣盡して金に換へ、足利絹をあまた買ひ積んで、あの重助を伴に連れ、はるくと京へ上つたのは今から七年の昔であつた。

宮木。商人が旅するは渡世の習、珍らしからぬことではあれど、鎌倉や足利への行き通ひに、七日十日の旅寝すら、留守は女子のさびしいもの

を、百里に餘る京上り、歸り來る日は何日とも知れぬ。悲しい別離も人の世の、逃れぬ運命と諦めて、泣いて送つた女房を、お前は忘れてゐなされたか。(泣く。)

勝四郎。それが懺悔ぢや、聞いて呉れ。目ざす都へ上つて見れば、亂れたる世の淺ましさを、冠も笏も地に墜ちて、都も鄙も同じく荒れた。明けでも暮れても軍の沙汰で、商賣などは思ひも寄らねば、早々に浪華へ落ちて行くと、こゝも亦同じこと。それからそれへと流れ／＼と、長門の果まで行き着くと、こゝは流石に大内殿の御領分、世も平穩で町も賑ひ、商賣も繁昌して金も儲かる。現世からなる極樂とはこゝの事ぢやと、その面白さに我を忘れて、半年餘りも夢のやうに遊び暮してゐたのぢや。

宮木。家を忘れ、女房を忘れ、我を忘れてゐるほどの面白い處から、お前

は何うして歸られました。

勝四郎。さあ、其の面白いと云ふのも些との間で、極樂は矢張地獄であつた。過ぎし三月の二十四日、赤間ヶ關の先帝祭を見物に出て、大内家の某若侍と懇意になり、面白さうに廓話などしてゐると、俄に謀叛が起つたとの噂で花に嵐の亂騒ぎ。わが眼の前で斬合が始まつて、敵が死ぬやら、味方が死ぬやら……。眼も當てられぬ體裁ぢや。加之も其の殺された女子には許嫁の男があつて、死ぬる際まで其男の手に取籠つてゐた。(思はず涙を拭ひて。)あゝ、慘らしいことぢやと思ふに付け、故郷の事や女房の事が一時に此胸に湧いて來た。都も鄙も差異なく、人間は何處へ行つても修羅の巷ぢや。何を樂みに、何を頼みに、遠い他國にうかくと夢のやうに暮してゐることぞ。到底此世が地獄ならば、矢はり住馴れた故郷に戻つて、貞節な女房と仲睦しう暮すが切て

も優ぢやと、私も俄に悟を開いて、其夜の中に發足した。

宮木。では、行く先々で軍が始まり、いづこも同じ修羅の世の中と悟られ  
たか。

勝四郎。悟つた、悟つた。後に聞けば其時の若い侍も、龍王丸とかいふ  
御主君の公達を守護して落ちる途中、大勢の敵に圍まれて、これも二  
人ながら果敢ない最期を遂げたとやら……。見るも聞くも忌なことは  
かりで、いよく故郷が戀しくなり、一日も早く戻らうと心は急げど、  
生憎に又あの重助めが途中から急病を發して、箱根向ふの三島の宿  
で……。

宮木。あゝ、重助が病氣になつて……。

勝四郎。到頭これも死んで了ふた。

(勝四郎嘆息す。宮木も泣く。)

細四郎。其の後仕末や何や彼やで、思ひの外に日數も積つて、夏の衣に秋

風の吹く時節となつた。いよく歸りの急がれて、今日の夕方やうや  
う戻り着いた真間の故里……。やれ嬉しやと見廻せば、僅か七年ほど  
見ぬ中に、扱も扱も變り果てたものぢや。往古の繼橋も跡断えて、變  
らぬものは水の音ばかり、たましく途で逢ふ人も昔馴染は一人もない。  
村も田畑も荒れ果て、いづれが自分の住家かと、龍宮から戻つた浦  
島のやうに、少時は尋ね迷ふてゐたよ。

宮木。七年以前に較べると、この里も世が違ふやうに變り果てました。小  
田原の北條殿と阿房の里見殿とが度々の合戦で、鴻の臺から真間のあ  
たりは、軍馬の蹄に年々踏み荒され、家は焼かれ、人は逃げ隠れて、  
田には耕す男もなく、家には機織る女もなく、一時は人無さ里と見る  
までに衰へましたが、軍も此頃少しく鎮つて、他國に隠れた人々も漸



次に遠近から戻つて來ました。

勝四郎。其間お前は何うしてゐたのぢや。

宮本。何時お前が戻らうも知れぬものを、何うしてこゝを立退かれませうぞ。いかなる難儀を忍ぶとも、夫が再び歸るまでは必ず此家を離れまいと、辛い悲しい怖しい數々を堪えくゝて、あるに甲斐なき世を送りつゝ、兎も角も今日まで生きてゐました。

勝四郎。聞けば聞くほど面目ない。それほどの艱難辛苦を堪えて、音信もない夫を待つてゐて呉れた志、今改めて禮をいふぞ。七年以來の不實や無沙汰は此の通り謝つてゐる。免して呉れ。

宮本。たとひ一旦は忘れられても、斯うして歸つて來て下されば、今まで生きてゐた甲斐もあります。廣い世間には妻よりも不運な女子があつて、別れし夫の戻らぬ中に土となつたのもあるとか聞きました。こ

れ、御覽なされ。(縁端に置きたる白桔梗を把る。)この花に就て悲しい話がござりまする。

勝四郎。とは又、どんな話ぢやな。

宮本。矢はりお前と同じやうに、遠い他國へ商賣に出て、幾年も歸らぬ男がござりました。其の女房は待ち焦れて、半年餘りの長煩ひに遂に此世を去りました。(涙を拭ひ。)死ぬる際に遺言して、妻の墓の傍には白い桔梗を栽えて呉れ、桔梗の花さく秋になれば、夫は大方戻つて來やう。それを妾の魂魄ぢやと云うて、夫に見せて下さりませ……。(泣き入る。)

勝四郎。それは哀れな話ぢや喃。して、其の桔梗の花は咲いたか。

宮本。此のやうに白く咲きました。

勝四郎。して、其の夫は戻つたか。

宮本。さあ、戻つたとても既う遅い。(又泣く。)あたりの人々も哀れに思

て、誰が作り出したとも無しに、此頃謳ひ始めた『白桔梗の歌』と云ふのがあります。歌も哀れ、節も哀れ、聞いても涙が零れるやうな。勝四郎。其歌の文句と云ふのは……。

宮木。お望みならば謳ひまする。

(宮木は白桔梗の花を持ちて、すゝくと庭に降り立つ。)

宮木。白桔梗、形見に残る白桔梗……。

唄へ花が開けば秋が来る、秋は来れども人は来ぬ。

宮木。白桔梗、墓場に栽えた白桔梗……。

唄へ人は来れども花は咲く、花は涙の露に泣く。

(宮木は桔梗の花を持ちて舞ふ中に、勝四郎はうとくととなる。)

勝四郎。何さま哀れな歌ぢや喃。久振で我家へ戻つて、疲勞が出た故か、頬にうとくとと睡たうなつた。

宮木。もう一度繰返して謳ひまする。よう聞いて下され。

唄へ白桔梗、花が開けば秋が来る、秋は来れども人は来ぬ。

唄へ白桔梗、人は来れども花は咲く、花は涙の露に泣く。

(宮木再び舞ふ中に、勝四郎は愈々うとくととなる。宮木は桔梗を袖に抱きつゝ、墓の方へ行くよと見れば、姿は消ゆ。舞臺は俄に暗くなりて、一時は闇に鎮まる。下の方より里人佐市は娘お秋を連れて出づ。舞臺再び明るくなる。)

佐市。この空屋で誰やら話聲が聞えたと云ふのは眞實かの。

お秋。先刻妾がこゝを通つたらば、聞馴れぬ男の聲が聞えました。

佐市。はて、不思議ぢや喃。こゝは當時住む人もないに、日が暮れてから

男の聲が聞えるとは……。

お秋。若や狐か狸ではござりますまいか。妾は何だか氣味が悪くなりまし

た。

佐市。眞逆にそんなこともあるまい。若や盗賊の隠れ家にでもなつたのか、但しは行暮したる旅人が一家の宿を借りに入つたのか。念の爲に窺つて見やう。

(二人は内を透し見る。)

お秋。お、誰やら内に寝てゐる様子ぢや。

佐市。兎も角も呼び起して見やうか。

お秋。でも、若や悪漢であつたら……。

(お秋危みて袖を曳く。)

佐市。何、何、心配することは無い。まあ、待つてゐやれ。

(佐市は内に入る。お秋は門口にて窺ひ見る。)

佐市。お、草鞋がこゝに脱いである。お、笠もある。(勝四郎の服装を眺めて。もし、旅のお人……鳥渡起ささつしやれ。これ、旅のお人……)

(呼び起されて、勝四郎は初めて眼を睜く。)

勝四郎。お、うか、と假寝をして丁ふた。女房は……や、宮木は何

處へ行つた。女房……女房……。

(勝四郎は四邊をうろく見廻はす。)

佐市。何、女房……。では、あなた一人では無かつたのか。(顔を透し視る。)

や、あなたは勝四郎どのであつたか。

勝四郎。え。(佐市の顔を見る。お、あなたは佐市どのでは無いか。)

佐市。さうぢや、さうぢや。以前は隣に住んでゐた佐市老爺ぢや。して、

こなたは何日戻られた。

勝四郎。一時ほど前に戻つたばかりぢや。それにしても女房は……。

佐市。女房とは宮木殿のことか。

勝四郎。お、今の今までこゝに居たに……。

佐市。え。宮木殿がこゝに居たと……。こなたは夢でも見たのであらう。  
まあ、能く見さつしやれ。こゝが人の住んでゐる家か。疾うの昔に空  
屋になつてゐるのぢや。

勝四郎。え。空屋になつてゐる……。して、女房は……。

佐市。其の女房に就ては、悲しい話が種々あるのぢや。

(佐市は朽ちたる竹縁に腰をかける。お秋も進み入る。)

お秋。勝四郎どの、お歸りなされましたか。

勝四郎。お、お秋坊か。僅か見ぬ間に立派な娘になつた喃。

佐市。思へば月日は早いものぢや。こなたが旅へ出られてから既う七年に

なる。宮木殿が世を去つてから早や三年ぢや。

勝四郎。え。宮木が此世を去つたと……。

佐市。まあ、これを見さつしやれ。

(佐市は勝四郎を誘ひて上の方へ行く。勝四郎は氣もそゞろなる體にて、跣足のまゝに蹠いて行く。佐市は土饅頭を指して云ふ。)

佐市。宮木どのは一昨年の秋からこゝに住んでゐるのぢや。

(勝四郎は驚きて聲も出せず、地に座して眠を踏むのみ。)

お秋。こゝらあたりも軍の騒ぎで、大抵の人は一旦逃げ散つたれど、宮木

殿ばかりはお前の歸るを待つて……。

勝四郎。お、私の歸るを待つて……。

お秋。一人でこゝに残つてゐられましたが、幾年経つてもお前の音信は無  
し、餘りの事に待ち侘びて、半年ばかりのぶら〜病……。後は察し  
て下さりませ。

(お秋泣く。佐市も眼を拭ふ。)

佐市。最期の際に私等と呼んで、若し妻が死んだらば、墓の傍に白い桔梗  
を栽えて呉れ……。

勝四郎。や。(愈上驚く。)それは唯つた今、女房から残らず聴きました。白桔梗の歌の悲しい話も……。

お秋。では、こゝへ宮木どのが假に姿を現はして……。

勝四郎。大方然うでござらうよ。(涙を拭ふ。)今まで確にそこに居たが……。

佐市。はて、居る筈が無い。宮木殿の魂魄が此の墓の下から迷つて出て、こなたに久しい恨を云つたのであらうよ。

勝四郎。では、今まで此處にゐたのは、此世の人では無かつたか。(嘆息する。)

日本國中、何處へ行つても地獄ぢやと悟れば故郷が懐しく、早々に歸つて来て見れば、こゝも昔の春ならで、悲しい秋に泣かねばならぬか。

佐市。人間の世界は皆然うしたものでぢや。

勝四郎。然うしたものでござらうか喃。

(三人は顔を見合はして黯然。勝四郎は又もや嘆息して墓の前を眺める。)

勝四郎。わが女房の身の上とは知らずに、先刻は他人事のやうに聞いてゐ

た白桔梗……。夜目にも白く咲いてゐる。

お秋。改めてお前の手からお墓へ供へてお上げなされ。

佐市。宮木殿も嘸どや喜ぶことであらう。

勝四郎。せめては心ばかりの追善に……。 (桔梗の花を折る。)此の白い花を墓

にさゝげ、露の深い草の中に、念佛申して夜を明かさうか。

(勝四郎も墓の前に跪く。佐市とお秋は右左より拜む。蟲の聲さびしく聞ゆ。)

——幕——

(帝國劇場興行權所有)

心中浪華春雨

登場人名

赤格子九郎右衛門

大工の親方庄藏

大工の弟子六三郎

同 丁稚三吉

福島屋の遊女お園

他に捕手、會所の使、駕夫等

大阪大寶寺町、大工庄藏の家。二重家體の上の方には三尺の佛壇、其下は押入。ついで奥へ出入の障子二枚。その下の方は壁なり。軒には建前に用ゐたる七五三の柱五六本を懸けたり。庭の上の方には木納屋ありて、奥にも材木を積み、入口にも材木を立て掛け、こゝにて切組などすると覺しく、納屋の前には荒庭を敷き、四邊には鉤屑など散亂せり。納屋の傍には一本の櫻白く咲けり。下の方には格子戸あり。家の外には東横堀の川筋遠く見ゆ。寛延三年(今より百四十六年前)三月十八日の午後。(この一幕は總て竹本の淨瑠璃を用ゆること。)

淨へ紅を栽ゑし園生にあらねども、お園が色は隠れなき、勤め盛り戀盛り、春も盛りの彌生の日、そよ吹く風も南から、芝居を出でし戻駕籠。

(福島屋の抱妓お園、廿二歳の遊女、芝居歸りの姿にて駕籠に乗りて出づ。)

駕夫甲。もし、御免下さりませ。

三吉。(木納屋より出づ。)あゝ、あゝ。

駕夫甲。大工の親方庄藏どのはこちらでござるか。

三吉。あゝ、さうぢや。して、何處からござつたのぢや。

(駕夫は駕籠を下す。お園は駕籠より出づ。)

お園。(低聲で。) そんなら六三郎といふお人がゐる筈。新屋敷から來たと云うて、ちよつと呼出して下さんせ。

三吉。(不思議さうにお園を見る。) あゝ、六三どのなら其處にゐる。呼んであげう。六三どの、六三殿。

お園。これ、静に喃。

(三吉うなづきて納屋の方へ行く。)

お園。では、駕籠の衆。わたしはこの家にて些と用がござんす。お前方はもうこゝから……。

駕夫乙。戻つても可うござるか。

お園。わたしがこゝへ寄つたことは、必ず誰にも沙汰無しに、頼みますぞ

え。(紙に包みたる銀を與る。)

駕夫甲乙。ありがたうござりまする。(二人は空駕籠を擔ぎて去る。)

淨へ納屋の内より六三郎、何心なく立出で、互に見合はす顔と顔。

(納屋の中から大工六三郎、十九歳、手斧を持つて出づ。)

六三郎。あゝ、お園か。

お園。六三さん、入つても大事ござんせぬかえ。

六三郎。あ、待ちや。(三吉に。) これ、三吉。お前は仕事を了ふたら風呂に行くこと云うてゐた。仕事はもう止めにして、早う風呂へ行つて來や。

三吉。いや、職人が晝間から風呂に行たら、親方に叱らるゝは知れたことぢや。

六三郎。晝と云うても、もう七つ下りぢや。風呂へ行ても大事ない。若し

叱られたら私が謝つて興るほどに早う行きや、行きや。はて、素直に  
行くものぢやと云ふに……。

淨八 追ひ出さんと氣を焦る。お園も思案の懐から、紙とり出して細銀  
を、つゝむ問さへ悶しく。

お園。これ、丁稚どの、兄弟子の云ふことは何でも温順う肯くものぢや。  
お前に何ぞ土産を興りたいが、今は芝居の戻り道、他に持合はせた物  
もなければ、これで好きなものを買うて下され。な、判つたら早う、  
早う。はて、お前も粹にならしやんせ。

淨八 粹も不粹も今時は、欲が伴ふ世なりけり。

(お園は三吉の肩を叩きて、片手で拜む眞似をする。三吉は紙包を明けて莞爾し  
つゝ懐に収める。)

六三郎。這奴、ずるい奴め。さあ、此上は誰つてゐることもあるまい。早

う行きや、行きや。えい、まだか。

淨八 腹立紛れに振上る手斧の下を搔ひくゞり。

(六三郎は有合ふ手斧を振あげるを、お園は止める。)

三吉。はて、叱らしやんすな。私もこれから……(腰の手拭を取つて見せる。) 濕  
れに行くのぢや。

淨八 年には優せた小丁稚が、口合まじりに逃げてゆく。

(三吉は表の方へ去る。二人は後を見送る。)

お園。ほんに子供とて油断がならぬ。二人の様子を覺つたさうな。丁稚な  
ればこそ可けれ、若し親方さんにでも覺られたら何とせう。えい、ま  
まよ。どうでこゝまで來たからは、もし六三さん、わたしは内へ上る  
ぞえ。(縁に腰をかける。)

六三郎。はて、待ちや、待ちや、若やこゝへ親方が……。



お園。今年十九といふ若い男が、何故そのやうに氣が弱い。

(お園は焦れて駆け來り、六三郎の手を取りて、無理に内へ引上げる。)

お園。親方ばかりが怖しうて、わたしが怖しいとは思はぬか。親方に叱られても、多寡が勘當で事は濟む。わたしに心から恨まれたら、どうなることぢやと思はんす。

淨。二つも三つも年上の女子に深く思はれたが、お前の因果とあきらめて、いかなことでもあい〜と、素直に肯いてゐやしやんせ。

お園。若もわやくを云ふならば、爰据ゑるは未なこと。

淨。私の此手がある限り、打つて叩いて、掴つて突いて、屹度仕置をせにやならぬ。

お園。其時泣いても堪忍せぬぞえ。

淨。痴話も口説も年下の、弟を叱る如くなり。

六三郎。其様に叱つて給るな。幼い時に親に捨てられ、十歳の年から今日が日まで、この親方の御世話を受けた、御恩を仇に思はれうか。來年で無うては年季もまだ明けぬ丁稚上りの身の上で、遊女狂ひなどする事が、若し親方のお耳に入らば、何と云譯が出来やうぞ。斯ういふ中も萬一誰かに見付られはせまいかと、私は胸がどき／＼する。(左右を見る。)

お園。どうして來たとは知れたこと。此頃は半月ほども打絶えて消息も聞かねば、何うしたことかと氣も濟まず。けふは客衆に連れられて、南の芝居見物に行つたれど、舞臺を観るのも上の空、氣合が悪いと嘘云うて、中途から芝居をぬけ出し、歸り途に窃と尋ねて來ました。妾とても此のやうなことが旦那殿に聞えたら、必然叱らるゝは知れてある。あぶない棧橋を渡るはお互のこと。苦しい中の樂みとはほんに此事で

ござんせうか。

浄へ話半にあたふたと、駈戻る三吉は門口から、

(下の方より三吉走り出づ。)

三吉。これ、これ、六三どの。うかくしてはゐられぬぞ。親方さんが今こゝへ戻つて来るぞや。

六三郎。何、親方が戻つて来ると……。

三吉。今その辻で行き逢ふた。三吉どこへ行くと問はしやりますので、

風呂へまゐりますと有體に答へたら、案の通り叱られた。

お園。では、ほんとうに親方さんが……。

六三郎。今こゝへ戻つて来ると云ふ。こりや何うしたら可からうぞ。

三吉。(表を見る。)あれ、あれ、さう云ふ中に既らそこへ……。

浄へやれ情なや何とせん、表へは出られず、奥へは猶行かれず、二人は

うろく起ちつ居つ、狼狽へ廻つて木納屋の奥に、お園をやうやう押隠す。

(二人はうろくして庭に降り立ち、六三郎は慌てゝお園を納屋の奥に押隠す。

この間に親方庄藏、四十餘歳、下の方より出で来り、格子をあけて内に入る。)

浄へ親方は分別者、取亂したる此の體を、見て見ぬ振で打通る。六三郎は手持なく、

六三郎。お内にござると思つてゐましたに、何時の間にも何處へお出でなされたやら……。神詣か佛參か、又は芝居の御見物か。先づくお歸りなされませ。

浄へ挨拶さへも四度路なる。親方は苦笑ひ、

庄藏。先刻町の會所から呼びに来たので、ついそこまで行た所、思ひの外に話が長うなつて、小半時も暇を潰した。俺が腕で其間に鐵槌持つた

ら、銀一匁は叩き出さうものを、可憐ら損をして退けた。はい、はい。

六三郎。して、會所の用といふは、何のやうなことでござりました。

庄藏。いや。別に氣遣ひなこと無。海賊のお尋ね者が西國筋を逃げ延びて、此頃大阪へ入込んだといふ噂がある。俺は親代々の大工商賣、屋敷や町方に入入りも多ければ、若し聞き込んだこともあつたら、早速に届けて出よとの御沙汰。誰にもあれ、見附次第に訴人した者には、銀二十枚の御褒美を下さるゝと云ふのぢや。

六三郎。御褒美に眼が眩るゝではなけれども、放火盜賊を訴人するは、人の爲、世の爲といふもの。悪い奴は一人も残らず召捕つて了はねば、世間の人が枕を高くは寝られますまい。其の海賊とやらは何といふ奴でござりまする。

庄藏。さあ、それは何れ後で話さう。名主やお役人衆の前で窮屈な切口状。

いやもう肩が張つて、足が痺れて來た。はい、はい。先づ奥へ行て一休みせうかい。

六三郎。ほんに氣の詰る所へ出ると、誰しも氣草臥れがするもの。では、奥でゆるゝと……

庄藏。茶でも一杯飲むとせうか。時に六三、もう聽て日も暮るゝであらう。花見時の日和癖ぢや、どうやら空も陰つて來て、今夜は雨になりさうな。そこらに散つてゐる木の屑なども綺麗に掃除して、納屋に押込んである材木も……。(六三の顔を見る。)人の見ぬ中に、出すものは早く出し……。入れるものは早く入れて、始末を附けねばならぬぞよ。淨へそれと云はねど打つ釘は、流石大工の手並なり。こなたはいよく痛み入り、

六三郎。あい、あい。唯今直に片附けまする。

三吉。では、私が手傳ひませう。

庄藏。いや、納屋の始末は六三一人……。そなたは奥へ来て俺の肩でも揉みやれ。

三吉。あい、あい。

淨へ打連れてこそ入りにけれ。親方の情身に堪え、うしろ姿を伏拜み、

(庄藏、三吉は奥に入る。)

六三郎。えい、勿體ない親方様。六三郎が不仕埒を御存知ながら何にも云はず、大目に見て下さるお情は、決して忘れは致しませぬ。いや、そんなこと云うてゐる中に、又もや何んな邪魔が出やうも知れぬ。淨へとつかは駈けゆく納屋の前、出逢頭に、

お園。六三さん。こちらの親方は粹ぢや、粹ぢや。流石はお前の御主人ほどある。飛驒の内匠よりも此方の巧を見て見ぬ振の應揚さ、わたしも感

心してゐたぞえ。

六三郎。まあ、其のやうな仇口は後にして、斯う見附かつたからは長居はならぬ。早う戻つて呉れ。頼む、頼む。

お園。ぢやと云うて、此の姿で一人歩きも出来まい。お前そこまで送つて来て下さんせぬか。

六三郎。最前も云ふた通り、丁稚上りの六三郎ぢや。女郎と手を曳いて、うかく往來が出来やうか、其のやうな無理云はずと、早う戻つて呉れ。

お園。戻れと云ふなら戻りませうが……。して、お前、何日逢ひに来て下さんす。

六三郎。今夜と云うては出憎いが……。あゝ、明日の晩には必然逢はう。

お園。必然来て下さんすか。

淨なごりへ名残惜なごりしさに後髪ごかみ、ひくれて外そとも仄暗ほくらき、門かどにたゞずむ九郎右衛門くわんごえもん。

(赤格子九郎右衛門、三十八九歳、旅姿にて出づ。)

九郎右衛門くわんごえもん。(内うちを窺うかがふ。)御免下ごめんくだされ。

淨ふたりへ二人ははつと又吃驚またびっくり、狩場かりばの雉子起きすたち兼ねて、慌あはて、舊もとの草隠くさかくれ。

(二人は狼狽ろうたへて、お園は再び納屋なやに隠れ入る。)

六三郎むさぶろ。(門かどに来る。)何人どなたでござりまする。

九郎右衛門くわんごえもん。さういふ此方こなたは六三郎殿むさぶろどのではござらぬか。

六三郎むさぶろ。はゞ。

淨ふたりへずつと入いつて其手そのてを取り、

(九郎右衛門は内うちに入りて、六三郎の手を取る。六三郎驚く。)

九郎右衛門くわんごえもん。親おやは無なくとも子は育そだつと、世よの諺ことわざに嘘うそはない。よう健すこかに生まひ立たつた喃なう。

淨しさいへ仔細さいし知らねば薄氣味うすきみ悪わるく、

六三郎むさぶろ。して、お前は何人どなたで……。わたくしに何なんの御用ごよう。

九郎右衛門くわんごえもん。親子おやこが別わかれて十一年じゅういちねん、途中ちゆうちゆうで行ゆき逢あうても其れとは知しれまい。

況まじて折柄せりからの夕闇ゆふやみに、面體確めんたいかくと判わからずとも、九歳このつとせの年としまで聞きき馴なれた親おや

の聲音こゑは、耳みみの底そこにも残のこつてゐる筈はず。今更いまさら名乗なをのるも面目めんぼくなけれど、名な

乗のらでは濟すまぬ父ちちの九郎右衛門くわんごえもん、わが子の安否あんびを尋たづねに來きた。

六三郎むさぶろ。え、そんならお前まへが父様とさまか。

淨しさいへお懐なごしやと取縫とりすがる、血筋ちすぢの誠まことは千行ちんぎやうの涙なみだ。

(この中うち、一人ひとりの捕手とりては門かどに來りて内うちを窺うかがひ、首肯うなづきて去る。)

六三郎むさぶろ。何なには兎ともあれ、先まづぐこれへ……。

淨しさいへつきの親子おやこが縁先えんさきに、九郎右衛門くわんごえもんは腰こしを据すえ、四邊あたりを憚おそる聲こゑを潜ひそめ、

九郎右衛門くわんごえもん。膽太ぢふとく生うれたが身みの仇あだ、十露盤じゅうろばん彈たまく真面目まじめの商賣しょうばい悶もどかしく、堂だう

島の米商賣に濕手で粟の目算外れ、女房を捨て子を捨て、家出したは十一年の昔。四國西國の果まで飄泊ひ歩きしが、生れ故郷は懐し、わが子には逢ひたし、此頃窃かに大阪に上つて、色々に手を廻し尋ぬる處、悴は大工の親方庄藏殿に拾はれて、無事に奉公してゐるとの噂。聞いて心は飛び立てども、表向に名乗つて來るも面目なく、晝より此のあたりを徘徊して、そなたの出入りを窺ふ中に、日も暮れたり、こらに人も無し、今此の時と聲をかけて、初めて親子がめぐり合ふ。これも盡させぬ縁でがな。よくも達者でゐて呉れた。

淨へ六三郎は嬉しさと、又悲しさも取ませて、

六三郎。お前も好う生きてゐて下された。お前が家出した明る年、

淨へ母様は氣病で死なしやれた。わたしは稚兒途方に暮れて、

六三郎。父様戀しと明暮れに、泣いてばかり居りましたを、この親方

に拾はれて、十年の年季も最う一年。

淨へこれ見て下され前髪も、去年の春に剃りました。

六三郎。お禮奉公済したら、裏家住でも世帯を持つ筈。其時までに父様の居所が何うぞ知りたいたと、祈らぬ日とはござりませぬ。斯うして邂逅ふからは。

淨へどこへも行つて下さるなと、甘へるやうに搔き口説く。

九郎右衛門。親甲斐もない親を慕うて、それほどまでに思つて呉るか、さりとては愈よ面目ない。したが、まあ聞いて呉れ。俺も今は唐人商賣。とばかりでは判るまいが、長崎の果までも船を乗出して、唐人船と商賣するのぢや。こちらからも代物を積んで行けば、あちらからも代物を積んで來る。一船毎に虎の皮やら珊瑚珠やら山のやうに受取つて來て、儲けは十倍二十倍、いや面白うこと。これが九年十年續かうな

らば俺も日本で屈指の大福長者にならうも知れぬ。はて、吃驚するな。

これほどの膽玉が無くて、今の世の中が渡れやうか。は、は、は、は。

浄へ六三郎は夢心地、唯安閑と聽きおたる。父はいよいよ機嫌よく、

九郎右衛門。ぢやに因つて、そなたを迎ひに來た。鑿と槌を持つて魂限り働いても、多寡の知れた今の商賣、今日かぎりさらりと止めて、俺と一所に博多へ下れば、立派な大家の若旦那、何と夢のやうな出世であらうが……。先づ親方に逢うてこれまでの禮を述べ、暇を貰ふ掛合もせにやなるまい。

浄へ案内せよと云ふ中に、始終を窺ふ親方は、行燈片手に立出で、

(九郎右衛門は草鞋をぬぐ。奥より庄藏は行燈を提げて出づ。)

庄藏。どこのお人か知らねども、正直者の六三郎に好い智慧を付けて下された。先づお禮から云ひまする。

六三郎。あゝ、親方様。そんなら今の逐一を……。

庄藏。聞いたればこそ出て來たのぢや。得體の知れぬ旅の人を、誰に斷つて内へ入れた。早う逐ひ出して了はぬか。

浄へ苦り切つたる顔色に、こなたも少しく勃然として、

九郎右衛門。これは親方、初めてお目にかゝります。われ等は此の六三めが實の親、久振で逢ひに來た者、譯も糺さずに逐ひ返せとは……。

庄藏。其の六三めに逢ひに來たのが氣に入らぬ。おのれは我子が憎うてここへ來たのか。

九郎右衛門。え。

庄藏。おのれに見せるものがある。

浄へ懐より一枚の繪姿とり出し、

庄藏。やい、日本で屈指の大福長者とか云ふお人。この繪姿を鏡として、

おのれが生面を寫して見よ。赤格子九郎右衛門といふ海賊の張本、長崎奉行の目を逃れて、此大阪に紛れ込む。見附次第に訴人したら、銀廿枚の御褒美を下さると、繪姿までも添へて嚴しい御詮議を、知らぬは迂濶か大膽か。兒飼から仕立上げて足かけ十年、わが子のやうにも思ふ大事の弟子に、其のやうな親が持たされうか、海賊の子と呼ばされうか。親の恥は子の恥、弟子の恥は親方の恥、わが子に連坐の罪が着せたいか、親方の面に泥が塗りたいか。恥を知らば早く歸れ。淨へ疊叩いて罵れば、九郎右衛門びくともせず。

九郎右衛門。いかにも親方推量の通り、われ等は赤格子九郎右衛門、海賊といふ名は負ふたれど、天道も佛神も照覽あれ、人の物びたひらなか目をかけた覺えござらぬ。國法を破つて唐人船と商賣した、それが重き罪科と極つて、詮議の由は薄々聞いたれど、博多の住居は假の宿、われ

等が眞の住家とするは、日本の土よりも百千倍廣き海の上、東より追へば西に隠れ、北より向へば南に走る。長崎奉行などの手ではいかないかな。彼等が如何に立ち騒いでも、所詮及ばぬこと、多寡を括つて、今まで安穩に日を送りしが、わが子の愛に心ひかされ、うかくと故郷へ立戻りしは、九郎右衛門が運の盡る時節。水の上ならば、如何なる網をも破つて逃ぐる法もあれ、陸の上では鯨や鮫も蟲けらに劣る。八方の出口々々を取巻かれ、繪姿までも添へて詮議に逢うては、逃るゝ隙もござるまい。唯今聞けば、九郎右衛門を訴人したる者には、銀廿枚の御褒美を下さるとや。逆も助からぬ網の魚ならば、他人の獲物とならうよりも、親方の手料理に逢ふが切ても恩報じ、大事の命を進上申す、いざ繩打つて引立てめされ。淨へ腕を廻して眼を瞑づる。



庄藏。え、聞き分けのない男よな。褒美の金が欲ければ、其方で望むまでもなく、此方で疾くに訴人する。欲に眼が眩れ、わが弟子の親に繩かくる庄藏と思ふか。見損じられたが口惜い。赤格子九郎右衛門は六三郎の親といふこと、上にも已に御存知なればこそ、今日も町會所へ呼出されて御詮議受け、この繪姿までも渡された。そこへうかく尋ねて来るは、穴を這ひ出る狐も同様、わが子といふ餌に引かされて、罠にかゝるとは氣が付かぬか。早く歸れよ云ふはこゝのこと。生國の大阪で召捕れては、六三郎の恥になる。わが子に後指さすが親の慈悲か。わが子を日かげ者にするが親の情か。こゝの道理を合點したら、天竺南蠻蝦夷松前、遠い所へ勝手に行き。

淨へ齒ざしみてぞ叱りける。九郎右衛門はつと手を支へ、

九郎右衛門。あ、恐れ入つたる親方の御意見。この大阪で召捕れては、親方

の恥、わが子の恥、そこに心が付かざりし不調法、どのやうに叱られても一言ござらぬ。成程こゝは劔の中、片時も早う暇申す。六三も堅固で、親方大事に奉公せい。もう此世では逢はぬぞよ。

淨へ暇乞さへ匆々に、ゆくへも知れぬ旅衣、うすき契りの親と子を、結ぶ由なき片糸の、つながらるお園も伸び上れど、顔は見られぬ夕闇に、紛れ行くこそ危けれ。

(九郎右衛門は親方に挨拶して草鞋を穿き、出で行かんとするを、六三郎は取纏る。お園も納屋より忍び出で、窺ふ。九郎右衛門は六三郎を突退けて、足早に向ふへ去る。下の方より捕手三人窺ひ出て、顔を見合せて首肯き合ひ、直に其跡を追うてゆく。)

淨へ門に見送る六三郎、素破や大事と轟く胸。

六三郎。あゝ、今のは確に捕手の衆、父様の跡を追うて行つたは……。庄藏。何、捕手が跡を追うて行つたと……。え、心づくしの甲斐もなく、

この大阪でやみくくと繩にかゝるか。

浄へ親方も心ならず、手に汗握つて立つ處へ、會所の使走せ來り、使。もし、庄藏どの、會所から急用ぢや、早う、早う。

浄へ云ひ捨て、こそ歸りけれ。

庄藏。ひい。又もや會所から呼びに來たは、九郎右衛門が詮議と極つた。

何を問はれても知らぬと云ふまでのこと。骨が舍利になるまでも、この庄藏が引受けた。喃、六三。親に萬一のことあつても、必ず力を落すまいぞ。科人の子と指さされて、大阪の土地にも住辛くば、俺が添手紙して江戸の親方衆に頼んで遣る。大阪ばかりに日は照るまい。世間を狭く思ふなよ。はて、何をめろく。弱い奴め。

浄へ力を付くれど力なき、可哀の弟子の泣顔を、見返り見返り出で、行く。

(庄藏は下の方に去る。時の鐘さびしく聞ゆ。)

浄へ陰る習の春の日も、暮れて散りゆく花の雨、音も聞えず降る中に、無残やな六三郎、親の安否と身の行末、思ひ惱みて悄然と、濡るるがまゝに佇立めり。お園も泣く泣く走り出で、

お園。様子は残らず聞きました。たとひ名乗合はずとも、わたしに取つては大事の舅御様、どうか御無事に落したいと陰ながら祈つてゐたものを、斯うなつては心許ない。とは云ふもの、今更焦つても狂うても及ばぬこと。お前は不斷から氣の弱い人、必ずくよくよ思はんすな。

六三郎。何ぼ心を強う持つても、十一年振でめぐり逢ふた、父様が今にも召捕れ。

浄へ海賊の張本と謳はれて、大阪中を引き廻され、

六三郎。磔刑か獄門のお仕置を、子がのめくくと見てゐられうか。人の口

には戸が立てられず、あれ見よ大工の六三めは、引廻しの子ぢや、盗人の胤ぢやと、行く先々で指さされ、大事の親方にも耻かゝせ。浄へ出入先の仕事場や、仲間同士の寄合にも、

六三郎。どの面さげて出られうぞ。俺や既う生きてゐる氣は無い。

浄へ推量せよと泣きければ、お園も道理と思へども、わざと涙を押隠し、お園。それ、それが氣の弱いといふものぢや。親方さんの云はんした通り、大阪ばかりに日は照るまい。若もこの土地に居辛くば、餘焰の消えるまで二年三年、遠い他國へ足ぬきして、時節を待つてゐなさんせ。人の噂も七十五日、案じたものではござんせぬ。これ、泣いてばかりゐずと男らしう、

浄へ分別して見やしやんせと、割ツつ口説いつ宥むれば男もやうく合點して、

六三郎。成ほど、世間を狭く思ふなと、親方さんも云はしやれた。父様がいよゝゝお召捕と聞いたらば、添手紙を貰うて江戸へ出て、二年三年辛抱せうか。生れてから今日が日まで、大阪の外へは一足も出たことのない六三郎、他國の奉公は辛いであらうが……。

お園。はて、そこが辛抱。お前も既う子供では無し、石に食ひ付いても我慢せねば、男一匹とは云はれまい。丁度お前が戻る頃には、わたしの年季も濟んでゐる筈。どんな狭い裏家でも、二人が一所に睦まじう……。六三郎。あゝ、其時節まで待つてゐてたもるか。

お園。三年は愚か、五年が十年でも、必然待つてゐるほどに、江戸の若い女子に馴染が出来て、わたしを忘れて下さんすな。

浄へかたみに袖を絞りつゝ、末の松山末かけて、契る縁を淺からぬ。お園。これで妾も少しは落付いた。もう先刻から日が暮れたに、何日まで

もこゝに長居はならぬ。

六三郎。ほんに然うぢや。戻りが遅うなつては、家の首尾も悪からう。生憎に雨が降つて来た。傘を貸して與るほどに、まあ待つてゐや。淨へ行くと後影見送つて、

(六三郎は奥に入る。)

お園。江戸へ行くと勸めては見たもの、人にも依れ六三さんは、日頃から孱弱い身體、殊に氣の弱い生れ付、西も東も知らぬ他國へ出て、右も左も他人の中、

淨へ鳥でさへ旅鴉は窘められ、慘らしうてならぬもの。

お園。あの人も定めて明暮に、他國者よと侮づられ、たんと苦勞をするであらう。それを知りつゝ出して遣るは、赤兒を川へ突き落すやうなもの。と云うて、他には法も無し。

淨へあゝ何とせん何となる、鳴るは太鼓の音高く、出口出口を塞がれて、逃場に迷ふ九郎右衛門、後を慕うて捕手の人數、御用々々と取まぐを、抜けつ潜りつ必死の働き、突退け跳退け蹴倒して、姿は見えずなりにけり。

(太鼓の音。向ふより九郎右衛門逃げ来るを、捕手は追ひ來りて、この家の外にて闘ひ、九郎右衛門は再び下の方へ逃げゆくを、捕手はついて追うて行く。お園は内より窺ふ。太鼓の音暫く止む。六三郎は番傘を持ちて奥より出づ。)

六三郎。これ、これ、今の物音は……。

お園。夜目に確とは見えねども、父様が追はれて來たやうな。

六三郎。今の太鼓は出口々々を固めの合圖、今頃までこゝらに迷うてゐては、所詮逃るゝ目的はあるまい。情なや父様の御運も盡きたか。

お園。はて、もう其れは云はしやんすな。では、わたしは行きますぞえ。

親方さんとも相談して、いよく江戸へ行くと決つたら、必然暇乞ひに顔見せて下さんせ。よいかえ。

浄へ身の善悪は白張の、傘を持つ手も顛はれて、開く轆轤の弾き金、かたき誓も薄紙の、破れて骨となる太鼓、辻々にて打立つる。

(六三郎は傘を開き、お園と相傘にて門まで送り出す。お園は傘を受取りて、二足三足行きかゝる時、又やも四方にて太鼓の音聞ゆ。)

六三郎。お、又もや聞ゆる太鼓の音が……、あれ、あれ、西にも東にも……、浄へ南も北も塞がれて、父様は網の魚、え、是非もなや悲しやと、狂氣の如く堂と坐す。

お園。胸にひびく彼の音は……。

六三郎。修羅の攻太鼓を聞くやうな。

お園。(傘をすぼめて慌しく駆け戻る。六三郎さん。あれ、あの音は冥途の迎ひ……。

六三郎。え。

お園。わたしも一旦は勧めたもの、お前を江戸へは遣りたうない。愛しい男を他國へ遣つて、たんと苦勞をさせるよりも、矢つ張り二人が離れずに……。

六三郎。とは云へ、大阪にはあめくくと……。

お園。居られぬ所に居るには及ばぬ。二人が安々と住む國は、もし。

浄へ抱き寄せて囁けば、

六三郎。そんなら二人が今宵を限り……。

お園。未練は無いか。

六三郎。何の、生きてゐたからう。そなたと連れ立つて行くならば、

浄へ地獄の底も厭はじと、身繕ひして起ち上れば、心も空も暗き夜に、

修羅の太鼓のとうくと、冥途の迎ひぞ迫り来る。

(四方にて太鼓の音はげしく聞ゆ。)

お園。あれ、あれ、又もや太鼓の音。邪魔のない中、些とも早う。

(六三郎は納屋に走り入りて、小さき鑿を持ち来る。)

六三郎。大工の弟子には相應な。(鑿を見せる。)

お園。そんならこれで……

六三郎。お園、來や。

お園。あい……。

六三郎。(お園の手を取る。)  
あの太鼓は父様の命を縮むる音、二人もあの音を聞きながら……して、われくの死場所は……。

お園。どこへ行かうぞ、六三さん。

浄へ浄土は西と聞くからに、行く手は西よ西横堀。うき名を流す、血を

流す、戀の末こそ哀れなれ。

(お園は向ふを指させば、六三郎は首肯き、二人に手を取つて雨を中を走りゆく。太鼓の音絶えず聞ゆ。)

浄へ死にゆく子を他に見る、親の心や如何ならん。九郎右衛門は茫然と、納屋のうしろに立ちゐたり。

(この道具は半廻しになりて、納屋の背後を見せる。九郎右衛門たゞずむ。)

九郎右衛門。逃ぐる者は路を擇ばぬ譬、四方を取まかれて度を失ひ、親方の家とも心付かず、裏口より竊と忍び込み、捕手を遣り過さんと隠る、中に、思ひも寄らず我子の六三が、お園とやらと死に行く。

浄へやれ過まるなど出でんとせしが、

九郎右衛門。いや、いや、思へば世間は酷いもの、盗人の子と憎まれて、可哀や六三の額には、不運といふ極印を打たれたも同じこと。一生日陰で暮さうよりも。

淨へ人間の花盛りにんげんはなざかりに、美しう散るが却つて仕合せ、

九郎右衛門。止めずに殺した親を恨むな。われも所詮は逃れぬ命、千日前に

晒されて、やがて血染の赤格子九郎右衛門、冥途で親子の對面せん。

一足先に行き着いて、父の行くのを待つて居れ。

淨へ云ふも四邊を憚りて、涙を隠す身を隠す、便宜も無しや廣き世を、

我から狭き門の口。

(舞臺は舊に戻る。九郎右衛門は納屋のうしろより庭前を過ぎて、門口に忍び来る。奥より三吉來で來り透し見て、九郎右衛門の胸倉をつかむ、九郎右衛門突倒して門口へ行く。下の方より庄藏は町會所と記せる提灯を持ち、傘をさして出づ。)

九郎右衛門。お、親方か。

庄藏。九郎右衛門か。

淨へ提灯ふつと吹き消せば、闇は黑白無し……。

(庄藏は提灯を吹消す。九郎右衛門は向ふへ走り去る。雨の音、太鼓の音。)

幕

(松竹合名會社興行權所有)

鳥邊山心中

登場人名

|         |         |
|---------|---------|
| 菊地半九郎   | 若松の遊女お染 |
| 坂田市之助   | 同 お花    |
| 坂田源三郎   | 花菱の仲居お雪 |
| 菊地の若黨八介 | 大他に仲居ぜい |
| お染の父與兵衛 |         |

徳川時代。寛永三年十二月中旬。京都祇園の茶屋。常足の二重家體にて、上の方

に床の間、ついで出入りの襖。庭には飛び石、石燈籠などあり。騒ぎ唄のやうな下方入りの鳴物にて暮あく。(時刻は夜)  
(直に竹本の淨瑠璃になる。)

淨色里に、さて新らしき戀衣、お染と云へど何處やらに、染まぬ廓の風俗は、流石おぼこの町育。うき身は同じ簑蟲の、父をたづねてうろくと、座敷をぬけて忍び出で。

(奥の襖をあけて遊女お染、十七歳、あたりを窺ひながら出づ。)

お染。今お雪さんが耳打して、河原町の父さんが尋ねて来たとのこと。はて、どこにゐさんすやら。

淨へ父の與兵衛は庭傳ひ、顔見合せて。

(下の方よりお染の父與兵衛、五十餘歳の商人、風呂敷包を背負ひて出づ。)

お染。あゝ、父さん。

與兵衛。娘か。



お染。よう来て下さんした。して、あの春着は出来ましたかえ。

與兵衛。(縁に腰をかける。) おい、出来た、出来た。話は後のこと。まあ見やれ。淨い包とくく取出す、濃紫と黒綸子、男女の晴小袖。

(與兵衛は風呂包敷をあけて、黒と紫の着物二襲ねを出す。)

お染。おい、ほんに美事に出来ました。父さん、たんとお禮を云ひまする。淨い父もほくく打肯き。

與兵衛。はい、自慢するではなけれども、此の染色を見て呉りやれ。可愛い娘が廊へ来て來年は初の正月、どうかして他に負を取らすまいと、俺も蔭ながら案じてゐたら、江戸の好いお侍衆に馴染が出来て、春の衣装も其のお客人に拵へて貰ふと云ふこと。

お染。ほんに廊へ身を沈めてから、日數も浅い妾とて、來る正月の紋日とやら物日とやらをどうしたものかと初めから案じてゐるに、店出しの

晩から御馴染になつた江戸のお侍、妾のやうな者でも可愛がつて下されて、夜も晝も揚詰め、ほかの座敷へはまだ一度も出たことがござんせぬ。まあ、喜んで下さんせ。

與兵衛。さあ、それぢやに因て、俺もそなたの爲、また二つには其の御客人の爲、成たけ無駄な入費をかけずに、好い品を誂へさせたいと思ふたので、廊へ出入の呉服屋を其方退けに、俺が懇意の店へ直接掛合、半分値とまでは行かずとも、二割も三割も格安に仕立てさせた上に、これ見やれ、どうも云はれぬ染の好さ。これなら誰に見られても恥かしいことは微塵もない。まあ、鳥渡手を通して見や。

お染。はて、お前もまあ氣の短い。まだお客人にも見せぬ中に、手を通しては濟まぬこと。いづれ春になつたらな。

與兵衛。おい、是非一度は其の衣装を着た姿を

お染。見に来て下んせ。

與兵衛。拜みに來やうか。(手を合せる。)

お柔。あれ、父さんがてんごうばつかり。ほいほい。

與兵衛。はいはい。

淨へ起ち上りしが又見返り。

與兵衛。あい、これ、まだお目にはかゝらぬが其の江戸のお侍といふお方に。俺が好うお禮を申して居りましたと、忘れぬやうに申上げて呉れ。よいか。

お染。あい、あい。

與兵衛。此頃は悪い風邪が流行るさうな。よう氣をつけたが可いぞよ。

お染。あい、あい。

與兵衛。(行きかけて又立戻る。)それから喃。そのお侍と云ふのはお酒を召上

るかの。

お染。あい。随分たんと飲みなさんす。

與兵衛。そりやもう、あなたが召上るのは何んなに召上つても可いがの。そなたは其のお附合をして、必ず無理な酒を飲ひまいぞ。勤する身に

無理酒は大毒ぢやと云ふからの。

お染。よう合點して居ります。

與兵衛。では、今云ふた俺の言傳を必ず忘れて呉れまいぞ。よいか、よいか。忘れるな。

お染。あい、あい。そう云ふお前こそ歸る道を忘れさんすな。

與兵衛。はい、這奴め。いつの間にか廓の水に染みて、そのやうな憎て口を覺えたな。はい、はい……。

淨へ笑ふてこそは歸りけれ。

(與兵衛は下の方に去る。)

お染。あゝして父さんが喜んでゐるのも皆なあの半様のお尻、その揚げ詰の御座敷をぬけ出して、いつまでも斯んな處にゐては濟まぬ。どれ、早う行きませう。

淨へ行きかゝる後より、出合頭に。

(與より菊地半九郎、二十二歳の江戸の武士、酒に酔ひて出づ。)

お染。あゝ、お前は……。

半九郎。私を置去りにして、今まで何處に隠れてゐた。座敷をぬけて忍び男にでも逢うてゐたか。

お染。あい。このやうな男に逢うてゐました。(衣装を見せる。)

半九郎。おゝ、春着が出来たか。廓の習ぢやとか云うて、私もそなたに釣合ふやうな新らしい小袖を誂へさせられたが、これが私のやうな武骨

者に似合ふかな。はゝゝゝ。まあ、よい、よい。兎も角も仕舞つて置いて呉りやれ。したが、折角拵へたその小袖も、そなたと對に着る日は無いかも知れぬ。

お染。え。そりや又何故でござんすえ。

半九郎。將軍家が江戸へ御歸りの日が迫つた。とばかりでは判るまいが、將軍家には先月初めに御上落、われ々も御旗本の一人としてお伴の數に加はり、京に旅寢のつれづくりに測らずそなたと馴染を重ね、來春までは逗留と思つてゐたに、元旦の拜賀は俄に御模様替と相成り、當年内に當地を引拂うて、江戸表へ御下向と今朝支配頭から觸渡された。此上は所詮逗留は相成るまい。遅くも五日か七日の中には……。

お染。お別になるのでござんすか。  
淨へ呆れて詞も涙ぐむ。

半九郎。逢ふ夜の数は繁くとも、馴染んでから足掛け二月、左ほどに深い  
仲でもなければ、戀や情は扱置いて、まだ廓馴染ぬそなたの不憫さに、  
及ばずながら今日までは夜も晝もこゝへ来て、そなたの力ともなつた  
れど、侍は御奉公が大切、お供に外れていつまでもこゝに逗留は思ひ  
も寄らぬこと。察して呉りやれ。

お染。あい。(泣く。)

半九郎。市之助が無理に強るので、今宵は例よりも飲み過ぎた。あゝ、酔  
ふた、酔ふた。これ、お染。水を一杯汲んで来て呉れぬか。

お染。あい、あい。

(お染は奥に入る。)

半九郎。思へば不憫な。あゝ、酔ふた。こりや堪らぬ。(眩暈して倒れる。)

淨へ無残やお染は一瞬に、百年経たる簗れ顔、別れと聞けば悲しさの、

涙に聲も顫はれて。

お染。(出る。)  
お冷を汲んでまわりました。もし、半様。あゝ、いつの間に  
かうとくとくと……。

淨へ男の寝顔を打眺め。

お染。忘れもせぬ先月の中旬、妾が初めて店出しの夜に、こゝへ呼ばれた  
初會の一座は、どなたも江戸のお侍、疎勿があつてはならぬぞと、親  
方さんから氣を付けられ。

淨へ怖々出るには出たれども、馴れぬ座敷の術無さに、唯何となく悲し  
くなり。

お染。廊下で獨り泣いてゐたら、誰やら背後から窺と来て、はて何を泣  
く。泣くほど悲しいことがあれば、私が力になつて遣ると、見掛けは  
強さうなお侍が、優しう云うて下された。

淨へその嬉しさが身に染みて、今更思へば恥しい。色の諸譯も知らぬ  
身が、歸ると云ふを引き止めて。

お染。無理に願ふた縁結び。店出しの初めから仕合せな客を取り當てたと、  
朋輩衆にも羨まれ、父さんにも自慢して、喜んだのもほんの束の間、  
矢張り妾は不仕合せに。

淨へ生れた者かと忍び音に、啣ち歎くぞいぢらしき。俄に奥は賑はしく、  
浮かれ立つたる市之助、お花の手を取りよろめき出で。

(奥より坂田市之助、半九郎と同じ年配の侍、遊女お花の手を取り出て出づ。お染は着物を床の方に置く。)

市之助。これ、半九郎は何處に、何處に。お、お染はこゝに……。半九  
郎も居たわ、居たわ。(これも酒に酔ひたる體。)

お花。ほんに二人ともに手の悪い。座敷をぬけて隠れ遊び、此のまゝでは

堪忍なりませぬぞ。なあ、市様。

市之助。さうぢや、さうぢや。其の罰には何が好からうな。何は兎もあれ、  
起せ、起せ。

お染あい、あい。(半九郎を抱き起す。もし、お連衆が見えましたぞえ。

半九郎。(眼をひらく。)お、市之助か。座敷を替へて飲み直さうと云ふ洒落  
か。面白、面白。(起き直る。お染は水を出す。半九郎は飲む。)

市之助。さあ、仲居どもこれへ呼べ。

(お花は手を叩く。あいくと答へて、奥より仲居大勢出る。或は燭臺を持ち、或は酒肴を運ぶ。)

市之助。さあ、さあ、陽氣に騒げ、騒げ。京で遊ぶも最う四五日ぢや。江  
戸への土産に面白いことのあるだけを盡して歸らう。

お花。折角斯うしてお馴染になりましたに、お名残惜しいことでごさんす

な。もうこれ限りお目にかゝれまいかと思へば、心細いやうでなりませぬ。お染どのも其れを知つてかえ。

お染。あい。たつた今初めて聞きました。

市之助。聞いて定めて泣いたであらな。はて、隠すな。白粉が涙で汚れて

ゐるわ。は、は、は。これ、半九郎。お身は先刻から何故黙つてゐる。

面白い／＼と云ふた口の下から屈託らしい顔附、何ぞ仔細のある事か。

淨へ問はれて屹と顔をあげ。

半九郎。さて、市之助。お身と我とは竹馬の友ぢや。遠慮なく頼みたい事

がある。

市之助。改まつて何ぢやな。

半九郎。斯様な場所申すも異なるものぢやが、思ひ立つたら一瞬も待たれ

ぬ。この半九郎に二百兩の金を貸して呉れぬか。と云ふた處で、お身

も旅先で其れだけの貯へはあるまい。お身は京の刀屋に知己があるさうな。私の刀は備前物ぢや。その刀屋に談合して、二百兩に替へては呉れまいか。

淨へ市之助は眉を擡め。

市之助。思ひも寄らぬ頼みぢやが……。其の二百兩の費途は……。

半九郎。京の鶯を買ひたいのぢや。

市之助。京の鶯……。はて、お身にも似合はぬ風流なことぢやな。(云ひつ

つお染を見返りて扱はと首肯く)ひ、して其の鶯を江戸へ連れ行くのか。

半九郎。いや、籠から放して遣れば好いのぢや。大方舊巢へ戻るであらう。

お花。二百兩の鶯とは……。若や其處らに啼いてゐる……。 (お染を見返る。)

市之助。いや、そなたの口を出す所でない。(眼で制して)さて、半九郎。外見

の場所と云ひ満座の中で、それを打出すお身の心の中は、市之助も好

う察してゐるが、そりや悪い料見、お身は餘りに正直過ぎやうぞ。  
半九郎。え。

市之助。私も鶯は大好ぢやで、行く先々で鶯を聞いて歩く。殊に京は鶯の名所、金に明かし、暇に明かして、思ふさま鳴かせて見たが、所詮は一時の興に過ぎぬ。江戸へ歸れば又江戸の鶯がある。

半九郎。ぢやに因て、私も其の鶯を江戸へ持歸らうとは思はぬが、鳴く音が餘りに哀れぢやゆゑに籠から放して遣りたいのぢや。半九郎は人も知つたる意地張ぢやが、生れ附から涙脆い男、有餘る金を持つた身でも無し、家重代の刀を賣つて……これ、察して呉れ、察して呉れ。市之助。それも鶯を買ひ取つて、わが物にでもすることか。籠から放して遣るだけに、家重代の寶を手放そとは、まだ分別が至らぬ。何事も然ら一向には思ひ詰めぬものぢや。

淨へ取合ふ氣色もなかりけり。お染は悲しさ勿體なさ、心で窃と手を合

せ、泣くより外に事を無き。

市之助。さあ、これで鶯の話は濟んだ。息のある中に行く先々で、面白  
いこと爲盡したいのが、われ等一生の願望ぢや。(杯を取る。)さあ、注げ、  
注げ。

仲居。あい、あい。(酌をする。)

市之助。半九郎も飲め、飲め。

半九郎。むい。私も飲まう。(大きい碗を取る。)さあ、これへ注いで呉れ。

市之助。ほら、小氣味が好い喃。

淨へ笑ひさじめく折柄に、坂田源三郎血氣の侍、苦り切つてぞ打通る。  
お雪。(下の方にて。)まあ、まあ、お待ち下さりませ。

(お雪は仲居の風俗にて、市之助の弟源三郎を止めながら出る。源三郎は十九か

二十歳位の侍、羽織袴、大小にて、お雪を突き退けて庭先に入来る。

源三郎。兄上、これにお出でなされたか。

市之助。お、源三郎か。何しにまゐつた。

(源三郎は縁に上りて座に着く、半九郎は黙つて酒を飲んでゐる。)

源三郎。(苦々しげに一座を見返る。)拙者は兄に火急の用事があつてまゐつた者。

じやらけた女どもは見ると目障りぢや。皆、立て、立て。

淨へ睨み廻され勃然として。

お花。お前は市様の弟御さうな。いつも親の仇でも尋ねるやうなむづ

かしさうな顔ばかり。些と兄さまを見習うて、お前も粹にならしやん

せ。江戸への土産に好い女郎衆をお世話しよ。京の女郎と大佛餅とは、

唯見たばかりでは旨味の知れぬもの。噛みべめて味ふ氣があるなら、

お前も若いお侍、此方から身揚りして懸るほどの心中者が無いとも限

らぬ。兄嫁の妻が意見ぢや、一座になつて面白う遊ばんせ。

源三郎。え、つべこべと囁る女め。おのれ等の分際で、武士に向つて假

にも兄嫁呼はり、戯れとて容赦はせぬぞ。(刀を引寄せる。)

お花。お、何ぼ妾等のやうな果敢ないものでも、鯉の骨切を見るやうに、

さう安々とは切られまい。さあ、兄さまの眼の前で、美事妾を切つて

見やんせ。

淨へ冷み笑へば堪忍せず。

源三郎。おのれ其の頬桁を……。

(刀を引寄せるを、お染を始め、仲居等は寄りて支へる。半九郎は寝轉びて見物してゐる。)

市之助。源三郎、鎮まれ、鎮まれ。こゝを何處と思つてゐるのぢや。

淨へ源三郎は膝つき寄せ。



源三郎。それは拙者よりお尋ね申すこと。兄上こそ此處を何處と思召す。曩に御上洛の將軍家は俄に御歸りと觸れ出され、お伴してまゐりし江戸の諸侍も、遠からず京地を引拂ふに就ては、上の御用は申すに及ばず、各自の諸支拂ひ買ひがかりも綺麗に濟ませ、江戸への土産物も買ひ調へ、親類中の年寄どもへは神社の御符も頂いて行かねばならず、昨日は愛宕、今日は鞍馬と、天狗のやうに駈け廻る。その忙しい最中に、短い冬の日を悠長らしい色里の居續け遊び、私の用向は拙者一人が手足を擦切らしても事は濟めど、上の御用は一人が一人役、それでお前様のお役が勤まりまするか、組頭の首尾が好いと思召すか。京三界まで一緒に連れ立つて来て、弟に苦勞さするが兄の手柄か。少しは分別なされませ。

淨へ疊たゝいて云ひまくれれば、一座も白けて見えにけり。兄も少しく持

餘し。

市之助。もう可い、もう可い。何も彼も判つた、判つた。兄もやがて歸るほどに、そちは一足先へ歸れ。

淨へ見え透いた一寸逃れと、弟は中々合點せず。

源三郎。いや、どうでも歸りなされるゝならば、拙者も一緒に伴申す。さあ、直にお仕度なされませ。

市之助。それは無理と云ふものぢや。歸るには相當の仕度もある。まあ、何でも可いから先へ行け（起ち上る。）

源三郎。あ、兄上……。

市之助。はて、馬鹿堅い奴。野暮を申すな。

（市之助は奥に入る。お花もお雪も仲居等もつゞいて奥に入る。）

源三郎。え、情ない兄上……。もう一度御意見して、無理にも連れて戻

らにやならぬ。さうぢや。

淨へ起たんとするを引止め。

(今まで横になりゐたる半九郎は顔をあげる。)

半九郎。源三郎、待て、待て。

源三郎。お、半九郎か。

半九郎。斯様な場所で立騒いでは見苦しい。今夜は温順う歸つたが可からうぞ。兄は必然この半九郎が連れて戻る。安心して歸れ、歸れ。

源三郎。いや、安心してはゐられまい。一つ穴の貉が安受合を、眞に受けて歸られうか。兄が斯様な白痴を盡すも、お手前のやうな不仕埒の朋輩があればこそぢや。よい朋輩を持つて兄は仕合せ、拙者屹とお禮を申すぞ。

淨へむしやくしや紛れの八つ當り。

半九郎。は、そのやうに怒るものでない。お手前はまた年が若いで、他

ばかり悪い者のやうに云ふが、兄は兄、拙者は拙者ぢや。兄が遊ぶと

拙者が遊ぶとは、同じ遊びでも心の入れ方が違ふかも知れぬ。まあ、

何にも云はずに歸れ、歸れ。

源三郎。歸らうと歸るまいと拙者の勝手ぢや。

淨へ又起ちかゝるをお染は取付き。

お染。半様もあのやうに云うてごされば、まあ、まあ、お待ちなされませ。

源三郎。え、面倒な。退いて居れ。

淨。孱弱き女を突き放せば、力餘つてよろ／＼、倒れかゝりし膳の上、

酒も肴も飛び散つたり。半九郎も短氣の男。

半九郎。やい、源三郎。年下の者と思つて和かに接うてゐれば、云ひたい

三味の悪口、仕たい三味の狼藉、もう堪忍がならぬぞよ。素直に手を

下げて詫びて歸れば可し、左もなくばおのれの襟髪を引搦んで、狗見のやうに門端へ投げ出すぞ。

源三郎。は、そのやうな脅しを怖がる源三郎でない。夜晝と無しに兄を誘ひ出して、あたら侍を腐らせた悪い友達。江戸の侍の面汚しめ。そつちから詫びをせねば堪忍ならぬわ。

淨へ負けず劣らず軋み合ふ。傍にお染は手に汗握り。

お染。どちらが何方とも云はれぬ此場の仕儀、況ても二人ともに同じ御朋輩、もうお互ひに料見して……。

牛九郎。いや、其の料見はもうならぬぞ。おのれ此の牛九郎を江戸の侍の面汚しと云ふたな。其の仔細を申せ。

源三郎。仔細は今更云ふまでもないことぢや。御用を怠つて遊里に入浸る奴、それが武士の手本になるか。聞きたくば幾度でも云うて聞かす。

菊地牛九郎は侍の面汚し、恥曝し、武士の風上にも置かれぬ奴ぢや。

牛九郎。あ、好う云ふた。おのれも武士に向つて其れほどの事を云ふかは、相當の覺悟があらう。

源三郎。あ、念には及ばぬ。武士にはいつでも覺悟がある。

淨へ解けぬ詞の行き懸り、牛九郎はつつと起ち。

牛九郎。問答無益ぢや。源三郎、河原へ來い。

源三郎。面白い、眞劍の勝負せうか。

淨へいづれも堪えぬ血氣と短氣、押取り刀で立ち出づれば、お染ははつと氣もそゞろ。

お染。何ぼ侍衆ぢやと云うて、瑣細な事から云ひ募り、眞劍の果し合とは、餘りと云へば餘りの御短慮。これ拜みます、頼みます。どうぞ既う一度分別して、仲直りして下さんせ。

淨へ拜み廻るを又蹴放し。

源三郎。女が留むるを幸ひに、云ひ出した勝負を止むるか。卑怯者め。

半九郎。何の……。さう云ふものれこそ逃るなよ。

淨へ二人は縁より飛んで降り、支ゆる女を刎ね退けて、河原へ走りゆく

水の、あはれやお染は起ちつ居つ、人を呼ぶ間もあらばこそ、跡を慕うて……。

四條の河原。夜の景色。所々に枯柳の立木などあり。水の音聞ゆ。

淨へ往來さへ、暫し絶えたる夜の道、四條河原も冬されて、水の音のみ

物寂し。

與兵衛。(出づ。)あゝ、暗い晩ぢや。河原を通る方が近道のやうに思うてゐるが、斯う云ふ晩には矢張り町つゞきを歩いた方が優であつたかも知

れぬ。祇園を出てから路寄りをしてゐたので思ひのほかには夜が更けたやうな。どれ、どれ、急いで歸りませう。

(千鳥の聲聞ゆ。)

與兵衛。あゝ、千鳥が鳴く。いつも聞き慣れてゐるものゝ、赤兒の啼くやうな哀れな聲ぢや喃。はゝ、今頃は娘もあの春着を江戸のお客人に見せて、定めて自慢してゐることであらう。同じ勤めをしてゐても、あゝ云ふ力になる頼もしい客人があれば、親方の首尾も好し、娘も氣丈夫、俺も安心と云ふものぢや。あゝ、千鳥が又鳴くわ。千鳥も寒からうが、俺も寒い。風邪引かぬ中に行きませう。あゝ、よい鹽梅に雲の缺けた所から薄月が出たやうな。

淨へ呟さく行きかけて。

(與兵衛は下の方に去らんとして、上の方を見返る。)

奥兵衛。や、誰やら斬合うてゐる様子。あゝ、刃物が光るわ。あゝ、あゝ、

段々こつちへ斬結んで来るらしい。喧嘩か物取か知らぬけれど、傍杖の怪我せぬ中に、行きませう、行きませう。さうぢや、さうぢや、

淨へやがて嘆きの種どとも、知らぬ白髪しらがの型老爺かたおやぢ、足を早めて立歸る。

(奥兵衛は急いで立去る。水の音はげしく上の方より半九郎と源三郎は斬結びながら出づ。月は折々に隠れて、二人は探りながらに闘ひ、半九郎は遂に源三郎を斬倒す。月は又明るくなる。)

淨へほつと一息月かけを、たよりにお染は走り付き。

(上の方よりお染走り出づ。)

半九郎。あゝ、お染か。

お染。半様、御怪我はなかつたか。して、相手のお侍は……。

半九郎。この通りぢや。

お染。え。

淨へ一目見るより慄然として、齒の根も合はず顛たふひゐる。男は騒さわぐ景色もなく、刀を鞘さやに收めても、納り兼ねし胸むねの闇やみ、暗くらきに迷まよふばかりなり。

(半九郎は源三郎の死體を片寄せ、河の水を掬ひて飲む。お染も手眞似にて自分にも飲まして呉れと云ふ。半九郎は水を入れる物が無いと云ふ思入にて自分の襦袢の袖を引き裂きて水を浸し、お染の口に啣ませる。千鳥鳴く。)

半九郎。孱弱かよわい女子をなごが血ちを見たら、定めて怖おそしくも思おもふであらう。どうぢや、もう落着いたか。

お染。は、はい。

淨へとは云ふものゝ案あんじられ。

お染。妾めかけはこんな勤つとの女子をなご、お武家の法はふは何なんにも知りませぬが、斯かうして人一人殺してもお前に何なんの御咎おとがめもござんせぬかえ。

半九郎。さあ、生れ付短氣の上に、酒には酔つたり、詞の行きが、堪忍のならぬ破目となつてあたら朋輩一人を手にかけたが……。今更思へば無分別。上洛の間は身持を慎み都の人に笑はるゝなど、豫て支配頭より觸れ渡されてあるに、場所は色里、酒の上の口論、加之も朋輩を打ち果しては罪を逃れんやうもない。

淨へ流石に酒の酔醒めて、半九郎は茫然と今更悔むも甲斐を無き。

お染。そんなら矢張りお侍でも、人を殺した罪は逃れず。

半九郎。尋常に切腹するか。但しは兄の市之助に仔細を打明け、弟の仇と名乗つて討たるゝか。二つに一つの他はあるまい。

お染。えい。

淨へ呆れて詞もなかりしが。

お染。あゝ、さうやうや。これを知つてゐるは妾一人、他には誰も見てゐぬ

のを幸ひ、早うこゝを逃げて下さんせ。

半九郎。何を馬鹿な。半九郎はそれほど卑怯な男でない。差したる意趣も遺恨もないに、朋輩一人を殺したからは、潔よく罪を引受くるが武士の道ぢや。若松屋のお染の客は人殺しと、明日は世間に謳はれて、そなたも肩身が狭からうが、これも因果ぢや、堪忍せい。

お染。何の、何の、勿體ない。足かけ二月明暮れに、不憫を加へて下された、御恩は山ほどあるものを、まだそればかりか立ち際に、重代の刀を手放しても、妾を受出して親許へ歸して遣らうとの思召は、あんまり冥加がおそろしく、心で拜んで居りました。もし、半様。どうでも死なねば濟まぬなら、一緒に死なして下さんせ。

半九郎。いや、それも亦無分別、由ない義理を立て過して、この半九郎に命までも呉れやうとは、親の嘆きを思はぬか。

お染。その嘆きを思はぬではなけれども、お前と云ふものに取縫り。

淨へわたしは今日まで生きてゐた。

お染。先刻あの祇園の茶屋で、もうお別れと聞いた時から、心は疾うに死んだも同様。日本中に二人とない、頼もしいお人に引分かれ。

淨へ年期の長い勤め奉公、どう辛抱がなるものぞ。

お染。店出しの宵からお前様の揚詰で、汚れのない妾の身體は、何處までも半様一人を夫として、清い一生を送りたさ。

淨へ聞き分けてたべ察してと、身を投げ伏してぞ泣きわたる。

半九郎。私もそなたを色里に沈めて置くがいぢらしく、身請して親許へと、思ひしことも食ひ違うて、斯うなるからは寧ろのこと、そなたを殺すはそなたを救ふ、慈悲の殺生であらうも知れぬ。濁りに沈んで濁りに染まぬ、清い處女と戀をして……。

お染。死ぬる際まで離れずに……。

半九郎。そんならこゝで……。

お染。あゝ、もし。(瞬く。)

半九郎。成程、屍を河原に曝さうよりも、いかなる人も遂に行く鳥邊の山を死場所と……。

お染。折角拵へた二人の春着を、あたら形見に残さうよりも、死んでゆく身の晴小袖。

半九郎。武士も討死と覺悟すれば、鎧物具美事に扮で装ち、立派に死ぬるが世の習。

お染。忍んで茶屋へ引返し。

半九郎。死装束を取つて來やうか。お染、來やれ。

お染。あい。

淨へ風に亂る、枯柳、招くがまゝに引かれゆく。

(二人はあたりを窺ひながら上の方に忍び入る。下の方より半九郎の若黨八介、足早に出づ。月は又隠れる。)

八介。やれ、暗いことぢや、折角月が出たと思たふに、雲めが又邪魔をし居つた。

(上の方より仲居お雪出で來りて、思はず八介に突き當る。)

お雪。お、御免なされませ。

八介。さう云ふのは仲居のお雪殿ではないか。

お雪。ほんに入介殿でござんしたか。

八介。支配頭から火急のお招ぎで、旦那のお迎ひに來たのぢやが、いつもの通りお在であらうな。

お雪。さあ、それが大變。お前の旦那の半様は市様の弟御と果し合をな

されうとて、この河原の方へ來られたとやら。

八介。え。して、して、それは何時のことぢや。

お雪。たつた今のこととござんす。

八介。たつた今なら何處ぞで太刀の音の聞えさうなものぢやが……。何にしても其れは誠に一大事ぢや。(上の方へ行かうとする。)

お雪。もし、もし、そつちではござんすまい。

八介。では、こつちか。(下の方へ行きかけて。) いや、こつちは私が今來た路ぢや。何にしても斯う暗うては埒があかぬ。早う提灯を持つて來さつしやれ。

お雪。合點でござんす。

(お雪は行きかけて歩き、透しながら上の方に引返す。)

八介。さあ、さあ、大變なことが出來て了ふたぞ。何で又、市之助様の弟



御と果し合なぞなされたのか。え、斯うしてゐても氣が揉める。  
無駄とは知りながらも最う一度こつちの河原を探して見やうか。(下の  
方に入る。)

(時の鐘、これより竹本の出語りになる。)

淨へ一人来て、二人連れ立つ極樂の、清水寺の鐘の聲、九つ心くらき夜  
に、捨つる此の身はいざ鳥邊野へ。女肌には白無垢や、上にむら  
さき藤の紋、中着緋紗綾に黒縹子の帯、年は十七初花の、雨にし  
ほるゝ立姿。

(お染は文句の通りの拵へにて、紫の布にて顔をつゝみ、上の方より忍んで出で  
あたりを窺ふ。)

淨へ男も肌は白小袖にて、黒き綸子に色淺黄うら。

(半九郎は文句の通りの拵へにて、同じく黒の綸子にて顔を隠し、後より出る。  
茶屋の騒ぎの笛聞ゆ。)

淨へ鳥邊の山はそなたぞと、死にゆく身のうしろ髪。

半九郎。ひく三味線は祇園町。

お染。茶屋のやま衆が色酒に、

半九郎。みだれて遊ぶ騒ぎ合ひ。

お染。あの面白さ見る時は、

淨へあの面白さ見る時は、過ぎし霜月十五日、初の御見を思ひ出す。

お染。あゝ、今更それを云ふも愚痴でござんす。さあ、些とも早う。

半九郎。お染。

お染。半様。

(月隠れる。二人は手を取りて行かうとする時。上の方よりお雪は提灯を持ちて  
先に立ち、後より市之助とお花出づ。)

市之助。それへゆく二人連は……。

番町皿屋敷

登場人名

青山播磨 あをやまはりま  
 用人柴田十太夫 ようじんしばた だいふ  
 奴権次 やつこ こんじ  
 同権六 おなむしくごん  
 青山の腰元お菊 あをやま こしもと おきく  
 同お仙 おなむしく おせん  
 澁川の後室眞弓 しぶがは こうしつまゆみ  
 茶店の娘お春 ちやみせ めい おはる  
 放駒四郎兵衛 はなれごま しろべ  
 並木の長吉 なみき ながきち  
 聖天の萬藏 しょうてん まんざう  
 田町の彌作 たまち やさく

淨へ河原傳ひに……。  
 (お雪はつかくと寄りて提灯を差付るを、半九郎は叩き落す。下の方より八介も出で來りて半九郎に突當るを、半九郎は八介を突き放し、お柴の手を取りて向ふへ走り去る。皆々後を透し見る。)  
 (床の三重、時の鐘。)  
 幕

(松竹合名會社興行權 所有)

橋場の仁助

他に若黨、陸尺

(一)

麴町、山王下。正面は高き石段にて上には左右に石の駒寄せ、石燈籠などあり。櫻の立木の奥に社殿遠く見ゆ。石段の下には櫻の大樹、これに沿うて上の方に葎張の茶店あり。店先に床几二脚を置く。明曆の初年、三月中旬の午後。  
(幡隨長兵衛の子分並木の長吉、橋場の仁助、床几に腰をかけてゐる。茶店の娘お春、茶を出してゐる。宮神樂の音聞ゆ。)

お春。お茶一つおあがりなされませ、

長吉。櫻も今が丁度盛りだね。

お春。こゝ四五日の所が見頃でござります。それに當年はいつもよりも取分けて見事に咲きました。

長吉。山王の櫻と云へば、俺達が生れねえ先からの名物だ。山の手で櫻と云やあ先づこゝが一番だらうな。

仁助。それだから俺達もわざと下町から登つて來たのだ。それで無けりやあ餘り用のねえ所だ。

長吉。これ、神様の前で勿體ねえことを云ふな。山王様の罰が中るぞ。

仁助。山王様だつて怖えものか。俺には観音様が附いてゐるんだ。

お春。お春中におやあございませんか。(笑ふ。)

仁助。やい、やい、こん畜生。ふざけたことを云やあがるな。

長吉。まあ、静かにしろ。どうせ姐さんに褒められる柄ぢやねえや。はい、はい。

お春。飛んだ粗勿を申しました。

(二人は茶を飲んでゐる。石段の上より青山播磨、廿五歳、七百石の旗本、編笠、羽織、袴。あとより權次、權六の二人、いづれも髭の生えたる奴にて附添ひ出づ。)

播磨。櫻は好く咲いた喃。

権次。まるで作り物のやうでござりまする。

権六。七夕たなばたの赤い色紙あかいろがみを引裂ひきちぎいて、そこらへ一度に吹き付けたら、斯かうもあらうかと思はれまする。

権次。はて、むづかしいこと云ふ奴ぢや。それよりも一口ひとくちに、祭まつりの軒飾のきぎのやうぢやと云へ。はし、はし、はし、はし。

(三人は笑ひながら石段を降りる。)

お春。お休みなさりませ。

(三人は上の方の床几にかゝる。長吉と仁助は見合ふ。お春は茶を汲んで来て三人に出す。)

長吉。おい、姐さん。このちへも最さいう一杯いっぱい呉くんねえ。

お春。は、は、は。(茶を汲んで来る。)

長吉。(飲まうとしてわざと顔を絞める。)こりやあ熱あつくつて飲のめねえや。

(長吉はわざと其の茶を播磨の前にぶちまける。)

権次。やあ、這奴無禮こいつぶれいな奴やつ。何なんで我等われらの前まへに茶ちやをぶちまけた。

権六。斯かう見た所ところが疎勿そとでない。おのれ等、喧嘩けんかを賣うらうとするのか。

長吉。賣うらうが賣うるめえが此方こつちの勝手かつてだ。買かひたくなけりやあ買かはねえまでだ。

仁助。一文奴もんやこの出でる幕まくぢやねえ、引込ひっこんでゐる。此方こつちは手前達てめへたちを相手あひてにするんぢやあねえや。

播磨。然しからば身みどもが相手あひてと申まをすか。(笠を取る。)仔細しさいも無なしに喧嘩けんかを賣うる、おのれ等らのやうな破落戸なはずもの漢ものが八百八町やっやちに蔓延はびこればこそ、公方様くばうさまお膝元ひざもとが騒さわがしいのぢや。

(この以前より放駒の四郎兵衛、町奴の拵へにて子分二人を連れ、石段を降り來り、中途に立ちて窺ひあたりしが、この時ずつと前まへに出る。)

四郎兵衛。仔細も無しに咬み付くやうな、そんな病犬は江戸にやあるねえや。白柄組とか名を付けて、町人どもを脅して歩く、水野十郎左衛門が仲間のお侍、青山播磨様と仰しやるのは、たしかあなたでござえましたね。

萬藏。さうだ、さうだ。この正月に山村座の前で、水野と喧嘩をした時に、たしかに見かけた侍だ。

彌作。違えねえ。坂田の何とか云ふ奴と一所になつて、其の白柄をひねくり廻したのを、俺あちやんと覚えてゐるんだ。

(長吉と仁助は床几を譲り、四郎兵衛は真中に腰をかける。)

播磨。ひい。白柄組の一人と知つて喧嘩を賣るからは、さてはあのれは花川戸の幡隨院長兵衛が手下の者か。

四郎兵衛。お察しの通り、幡隨院長兵衛の身内でも、些とは知られた放駒

### の四郎兵衛。

長吉。並木の長吉。

仁助。橋場の仁助。

子分一。聖天の萬藏。

子分二。田町の彌作だ。

權次。やい、やい。這奴等素町人の分際で、歴々の御旗本衆に楯突かうとは、身の程知らぬ蚊とんぼめ等。それほど喧嘩が賣りたくば、殿様にあねだり申すまでもなく、云値で俺達が買つて遣るわ。

權六。幸ひ今日は主親の命日と云ふでも無し、殺生をするには誂へ向さぢや。下町から蜿くつて來た上り鰻、山の手奴が引摺んで、片つ端から溜池の、泥へ埋めるから然う思へ。

四郎兵衛。そんな脅しを怖がつて、尻尾を巻いて逃げる程なら、白柄組が巢

を組んでゐる此の山の手へ登つて来て、わざ／＼喧嘩を賣りやあしねえ。此方を溜池へ打込む前に其方が山王の括り猿、御子供衆の御土産にならねえやうに覺悟をしなせえ。

播磨。われ／＼が頭と頼む水野殿に敵意を挟んで、兎角に無禮を働く幡隨院長兵衛、いつかは懲して呉れんと存じて居つたに、其の子分といふおのれ等が、わざと喧嘩を挑むからは、もはや容赦は相成らぬ。望みの通り青山播磨が直々に相手になつて呉るゝわ。

四郎兵衛。いゝ覺悟だ。お逃げなさるな。

播磨。何を馬鹿な。

子分四人。えゝ休めちまへ、休めちまへ。

(播磨も權次權六も身構へする。四郎兵衛、その他四人も身繕ひして詰め寄る。お春はうろ／＼してゐる。この時、東の揚幕より陸尺に女の乗物を昇せ、若黨二

(乗物の戸をあけて走らせ來り、喧嘩の真中へ乗物を卸す。)

長吉。あい、あい。お前達も目先が利かねえ。

仁助。こゝへそんなものを卸して何うするんだ。

二人。退いて呉れ、退いて呉れ。

(權次權六は若黨の顔を見て驚く。)

權次。あゝ、こなたは小石川の。

權六。澁川様の御乗物か。

(乗物の戸をあけて澁川の後室眞、弓五十餘歳の禰禰姿にて出づ。)

播磨。あゝ、小石川の伯母上、どうしてこゝへ……。

眞弓。赤坂の菩提所へ佛參の歸り路、よい所へ來合せました。天下の御旗

本ともあるべき者が、町人風情を相手にして、達引とか達入とか、毎

日々々の喧嘩沙汰、さりとは見上げた心掛ぢや。不斷からあれほど云

うて聞かしてゐる伯母の意見も、そなたといふ暴れ馬の耳には念佛さうな。主が主なら家來までが見習うて、權次、權六、そち達も惡あがきが過ぎませうぞ。

權次。權六。あい、あい。(頭を押へて踴る。)

四郎兵衛。見れば御大家の後室様、喧嘩の真中へお越し下されて、此のお捌きをお付けなさる思召でござりますか。御見物なら最う少しお跡へお退り下さりますせ。

真弓。差出た申分かは知りませぬが、この喧嘩は妾に預けては下さらぬか。播磨は後で嚴しう叱ります。まあ堪忍して引いて下され。

四郎兵衛。さあ。(思案する。)

長吉。でも、此のまゝで手を引いては。

仁助。親分に云譯があるめえせ。

萬藏。今更跡へ引かれるものか。

彌作。斯うなるからは命の取遣りだ。

四人。構はずに遣つちまへ、遣つちまへ

真弓。不承知とあれば妾がお相手。

四郎兵衛。え。

真弓。それとも素直に引いて下さるか。

四郎兵衛。こりやあ困りましたね。いくら御武家にした所が、女を相手に町奴が真逆に喧嘩もなりますまい。喧嘩は元より出たところ勝負、今日に限つたことでもござりませぬ。お前様のお扱ひに免じて、こゝは素直に歸りませう。長吉も仁助も蟲を堪えろ。

真弓。よう聞分けて下された。そんならこゝは溫和う。

四郎兵衛。どうも失禮をいたしました。もし、白柄組のお侍、いづれ又ど

こかで逢ひませうぜ。(長吉に仁助等に。)今聞く通りだ。さあ、皆な早く来  
よ、来よ。

長吉。仁助。あゝ、あゝ。

(四郎兵衛は先に立ちて、長吉と仁助と子分二人は向ふへ去る。)

真弓。これ、播磨。こゝは往來ぢや、詳しいことは屋敷へ来た折に云ひま  
せうが、武士たる者が町奴とかの真似をして、白柄組の神祇組のと、  
名を聞くさへも苦々しい。喧嘩が何で面白からう。喧嘩商賣は今日限  
り思ひ切らねばなりませんぞ。

播磨。はあ。

真弓。肯かねば伯母は勘當ぢや。判りましたか。

播磨。はあ。

真弓。それ。

(真弓は眼で知らすれば、陸尺は乗物を昇き寄せる。真弓は乗物に乗りしが、再  
び首を出す。)

真弓。これ、播磨。そちが悪あがきをすると云ふも、一つにはいつまでも  
獨身であるからの事ぢや。此の間も鳥渡話した飯田町の大久保が娘、  
どうぢや、あれを嫁に貰うては……。

播磨。さあ。(迷惑さうな顔。)喧嘩のことは兎も角も、その縁談の儀は……。  
真弓。思ぢやと云ふのか。(考へる。)ほかの事とも違うて、これは無理強にも  
なるまいか。そんなら其れはそれとして、返すぐも白柄組とやらの  
附合は、きつと止めねばなりませんぞ。

播磨。はあ。

(真弓は乗物の戸を閉める。若黨等は播磨に一禮して向ふへ乗物を昇いてゆく。)

権次。殿様。悪い所へ伯母御様が見えになりまして。



権六。わたくし共までが飛んだお灸を据ゑられました。

播磨。(笑ふ。)伯母様は苦手ぢや、所詮頭は上らぬわ。今伯母様に叱られた、其の白柄組の水野殿は、仲間の者を誘ひ合せて、今夜わが屋敷へ参らるゝ筈ぢや。酔ふたら又面白い話があるらう。

(風の音して櫻の花散りかゝる。)

播磨。おゝ、散る花も風情がある喃。どれ、そろそろ歸らうか。

権六。権六。はあ。

(権六は茶代を置く。お春は禮を云ふ。播磨は行きかゝる。)

(二)

番町青山家座敷。二重家體にて、上の方に床の間、つゞいて襖。庭には飛び石。上の方に井戸ありて、井戸のほとりに大なる柳を栽えたり。同じ日の夕刻。  
(上の方より庭傳ひに、用人柴田十太夫が先に立ち、腰元お菊、お仙の二人出づ。二人は高麗焼の皿五枚を入れたる箱を一つ宛持つ。)

十太夫。これ、大切の御品ぢや。氣をつけて持つて行け。よいか。  
二人。かしてまりました。

十太夫。唯今お藏から取出したばかりで、別に仔細もあるまいが、念には念に入れよと云ふこともある。お勝手へ持つて退るまでに兎も角も一度吟味をいたさう。その箱をそれへ運べ。

二人。はゝ、はゝ。

(三人は縁に上る。お菊は先づ箱をあけて五枚の皿を出す。十太夫は眼鏡をかけて一々に検める。つゞいてお仙も五枚の皿を出す。十太夫は同じく検めて首肯く。)

十太夫。よし、よし。十枚ともに別條ない。くどくも申すやうなれど、これは大切のお品ぢや。必ず疎勿があつてはならぬぞ。

お仙。御用人様。この十枚のお皿が何うして其のやうに大切なのでござりまする。

十太夫。そちは新參、詳しい譯を能く知るまいが、この皿は高麗焼で、御先祖様から代々傳はるお家の寶ぢや。萬一誤つて其の一枚でも打碎いたら嚴しいお仕置、先づ命は無ないものと覺悟せい。

お仙。え。(顫へる。)

十太夫。ぢやに因よつて滅多めつたに取出とりだしたことは無いのぢやが、今宵こよひは白柄組しらつかぐみのお頭水野十郎左衛門様おんみづのぢらうざゑもんさまがお越こしに相成あひなるに就つて、殿様格別とのさまかくべつのお心入こころいれで、御料理おれうりの器うつはに其のお皿さらをおつかひなさる。又またしても諄くどく申まをすやうぢやが、一枚々々まいまい町重ていぢゆうに取扱とりあつかへ。割わるは勿論もちろん、疵きずを着つけても一大事だいじぢやぞ。よいか。

二人。はい、はう。

十太夫。殿様とのさまがお歸かへりになるまでに、あちらのお客間きやくまを取片附とりかたづけて置おかねばならぬ。では、そのお皿さらを元もとのやうに箱はこに入れて、お勝手かたての方ほうへ運はこ

んで置おけ。やれ、忙しいことぢや。

(十太夫はそくさと庭にわに降りて上かみの方に去さる。お仙は跡あとを見送みおくる。)

お仙。ほんにいつもくく氣急きせきしいお人ひとぢや。併しかしそれほど大切たいせつなお皿さらならよく氣きをつけて取扱とりあつかはねばなるまい。喃なう、お菊きくどの。はて、お前まへは何なにをうつとりとしてゐるのぢや。

お菊。(突然とつぜんに。)お仙せんどの。

お仙。何なんぢやえ。

お菊。この頃このころ殿様とのさまは御縁談ごえんだんがあるとか云いふ噂うわさぢやが、お前まへそれを本當ほんたうぢやと思おもふかえ。

お仙。さあ、それは新參しんさんの妾めかけには判わからぬが、何なにやらそんな噂うわさがないでも無ないやうな。

お菊。無いでもないやうな。(口くちの内うちで繰返くりかへす。)若わかしあつたとしたら。

お仙。おめでたいことぢや。

お菊。さうかも知れぬ。(腹立たしげに云ひしが又思ひ直して。)いや、それは嘘であ

らう。嘘ぢや、嘘ぢや。嘘に違ひない。

お仙。でも、殿様も既うお年頃ぢや、奥様をお貰ひなさるに不思議はある

ま。

お菊。奥様……。(又腹立たしげに。)内の殿様は奥様などお貰ひなさる筈が無

いのぢや。

お仙。はて、そんなに怖い顔をして、何故妾を睨むのぢや。お前は此頃様

子が變つて、じつと考へてゐるかと思へば、急に悶れたり怒つたり、

何か氣合でも悪いのかえ。

(お菊は黙つて俯向いてゐる。琴唄のやうな獨吟になる。)

唄へ世の中の、花は短き命にて、春は胡蝶の夢うつゝ、何が戀やら

情やら。

(お仙は五枚の皿を片附けて箱に入れる。お菊は矢はり考へてゐる。)

お仙。隣のお屋敷では又いつもの琴のお浚ひが始まつたやうな。(箱を抱え

て起つ。)さあ、お前も早うお勝手へ……。妾は一足先へ行きますぞえ。

(お仙は庭に降りて下の方に去る。)

お菊。(苛々して。)え、何としたものであらう。妾といふ者を打捨て、

ほかの奥様をお貰ひ遊ばすやうな、そんな嘘つきの殿様でないことは、

不斷から能く知つてゐるものゝ、小石川の伯母御様の御媒介で、飯田

町の大久保様とやらから奥様をお迎へなさる、内相談があるやうな。

(又考へる。)いや、それはほんの人の噂ぢや。お、さうぢや。現にこの間

も殿様にそれを云うて念を押したら、え、馬鹿め、俺を疑ふにも程

がある。まあ、黙つて長い目で見て居れと、たゞ一口にお叱りなされ

た。叱られて嬉しかつたも束の間で、又何とやら疑ひの芽が噴いて來る……。えい、もう何うともなれ。

唄へ物に狂ふか青柳も、風のままに〜縋れて解けて、糸の亂れの果しなき。

(お菊は少しく悶れたる氣味にて皿を片附けてゐたりしが、又手を休めて考へる。)

お菊。よもやとは思ふもの、萬一ほんとうに奥様が來るやうであつたら……。えい、氣の揉めることぢや。たとひ口では何と仰せられても、男は偽りの多いものとやら。何とかして殿様の、心の奥の奥を確かに見極める工夫は無いか。(思案しながら我手に持つたる皿に不圖眼をつける。)

お家に取つては大切な寶といふ此の皿を、もしも妾が打碎いたら、殿様は何うなさるであらう。眞實妾が可愛いと思召すならば、よもや

御腹立はあるまい筈。さうぢや、寧ろ疎勿の振をして、この皿を一枚打毀して、お菊が大切か、寶が大切か、殿様の本心を試して見るが上分別ぢや。(又考へる。)とは云ふもの、大切のお道具を、ひざ〜毀すも勿體ない。

唄へ雲さへ暗き雨催ひ、故郷の空はいづこぞと、ゆくてに迷ふ雁の聲。

(お菊は皿を眺めて何う爲やうかと迷つてゐる。)

お菊。えい、もう寧ろのこと。

唄へしづ心なく散り初めて、土に歸るか花の行末。  
(この以前よりお仙は下手より出で來りて窺ひゐる。お菊は思ひ切つて一枚の皿を取り、縁の柱に打付けて割る。この途端に、下の方にて『お歸り』と大きく呼ぶ聲。お仙は下の方へ立去る。上の方より庭傳ひにて十太夫足早に出づ。)

十太夫。お、もうお歸りぢや。(下の方へ行かんとしてお菊を見る。)お菊、まだそ

ここに居つたのか。や、お皿を何うぞ致したか。これ、お菊。(慌て、縁に上る。)や、大切のお皿を眞二つに……。こ、こりや何う致したのぢや。仔細を云へ、仔細を申せ。

(十太夫は驚き怒つて詰め寄る。お菊は黙つて手をついてゐる。)

十太夫。え、黙つてゐては判らぬ。こ、こりや一體どうしたのぢや。先刻もあれほど申聞かせて置いたに……。斯様な疎勿を仕出來しては、そちばかりでない、この十太夫も何のやうな御咎めを受けるも知れぬ。こりや飛でもないことに相成つたぞ。

(十太夫途方に暮れてゐる處へ、奥の襖をあけて青山播磨つかく出づ。)

十太夫。お歸り遊ばしませ。御出迎へと存じましたる處、思ひも寄らぬ椿事が出來いたしまして、失禮御免下さりませ。

播磨。思ひも寄らぬ椿事……。 (打笑む。) 十太夫が又何か狼狽へて居るな。あ

わて者め。は、は、は、は。

十太夫。いや、あわてずには居られませぬ。殿様、これ御覽下さりませ。

(皿を指さす。)

播磨。(割れたる皿を見て驚く。)や、高麗の皿を眞二つに……。誰が割つた。(怒る。)

お菊。わたくしが割りました。

播磨。菊、そちが割つたか、定めて疎勿であらうな。

お菊。はい、恐れ入りました。大切なお皿を損じましたは、わたくしが重々の不調法、どのやうな御仕置を受けませうとも決してお恨みとは存じませぬ。

播磨。お、先づ以て神妙の覺悟ぢや。青山の家に取つては先祖傳來大切の寶ではあるが、疎勿とあれば深く咎める譯にもまゐるまい。以後を屹と慎めよ。

お菊。はい。有がたうござりまする。(安心して喜ぶ。)

播磨。幸ひ今夕の來客は水野殿を上客として、他に七人、主人を併せて丁度九人ぢや。皿が一枚缺けても事は濟む。喃、十太夫。

十太夫。左様でござりまする。併し御客人の御都合は兎もあれ、折角十枚揃ひましたる大切の御道具を、一枚缺きましたる不調法は、手前も共に御詫申上げまする。

播磨。(打笑む。)いや、いや、心配いたすな。たとひ先祖傳來とは申せ、鎧兜鎗刀のたぐひとは違うて、所詮は皿小鉢ぢや。私は左のみ惜いとも思はぬ。併し昔形氣の親類どもに聞えると面倒、表向きは矢はり十枚揃うてあることに致して置け。

十太夫。はつ。

播磨。御客人もやがて見えるであらう。座敷の用意萬端、滞りなく致し

て置け。そちは名代の疎忽者ぢや。手落のないやうに氣をつけい。

十太夫。委細心得て居りまする。萬事手ぬかりのない筈とは存じて居りますが、では最う一度念の爲めに御座敷を見廻つてまゐりまする。御免下され。

(十太夫はそくさと再び庭傳ひに上の方へ去る。お菊は残る四枚の皿を箱に入れる。)

お菊。飛んだ疎忽をいたしまして、何とも申譯がござりませぬ。(手をつく。)

播磨。はて、くどう申すな。一度詫びたら其れで可い。まことを云へば家重代の高麗皿、家來が誤つて碎く時は手討にするが家の掟ぢやが、餘人は知らず、そちを手討になると思ふか。は、は、は。碎けた皿は人の目に立たぬやうに、その井戸の中へ沈めて了へ。

お菊。は、は。

(お菊は嬉しげに起つて先づ皿の箱を縁先に持ち出し、更に缺けたる皿を取りて庭に降り、上の方の井戸に投げ込む。)

お菊。では、わたくしもお勝手へ退りまする。(皿の箱を抱える。) 御免下さりませ。

(お菊は下の方へ行きかゝる。)

播磨。待て、待て。左様に逃げてまゐるな。勝手の用はほかの女どもに任して置いて、まあ此處で少し話して行け。

お菊。はい。(嬉しげに縁に腰をかける。播磨も縁先に進み出る。)

播磨。母から此頃に消息はないか。

お菊。この一月ほど何の消息も聞きませぬが、大方無事であらうと存じて居りまする。

播磨。親一人子一人ぢや。寧ろ此の屋敷内へ引取つては何うぢやな。母は

屋敷住居は嫌ひかな。

お菊。いえ、嫌ひではござりませぬが、母を御屋敷へ連れてまゐりまするには、何も彼も打明けねばなりません。

播磨。何も彼も……。(打笑む。) 隠すことは無い。母にも打明けたら可いではないか。

お菊。でも……。それは……。(耻しげに俯向く。)

播磨。恥かしいか。もう斯うなつたら誰に憚ることもない。天下の旗本青山播磨を婿に決めましたと、母の前で立派に云へ。

お菊。云うても大事ござりませぬか。

播磨。そちの口から云はれずば、母を兎も角も屋敷へ連れてまゐれ。私から直々に打明けて申すわ。若し其時に、母が播磨を婿にするは不承知ぢやと申しても、そちは矢はりこゝに居るであらうな。

お菊。たとひ母が何と申しませうとも……。

播磨。いつまでも此處に居るか。

お菊。はい。

播磨。それを屹と忘るゝなよ。

(ふたりは顔を見合せて打笑む。上の方より十太夫足早に出づ。)

十太夫。殿様。そのお菊と申す女は重々不埒な者でござりまする。(敦園いて云ふ。)

播磨。何が不埒ぢや、皿を割つたのは疎勿と申すではないか。それともまた外に何か曲事を働いたか。

十太夫。いや、其の皿を割つたのは疎勿ではござりませぬ。縁の柱に打付けて、自分で割つたと申すこと。

播磨。自分でわざと割つたと申すか。

十太夫。朋輩のお仙がたしかに見届けたと申します。疎勿とあれば致方

もござりませぬが、大切のお品をわざと打割つたとは、あまりに法外の致し方。殿様が御勘辨なされても、手前が不承知でござります。屹と吟味をいたさねば相成りませぬ。

播磨。さりとは不思議のことを聞くものぢや。こりや、菊。定めて疎勿であらうな。

十太夫。いや、疎勿とは云はせませぬ。

播磨。はて、騒ぐな。どうぢや、菊。十太夫はあのやうに申して居るが、よもやさうではあるまいな。はつきりと申開きを致せ。

お菊。(胸を据えて。)實は御用人様の被仰る通り……。

播磨。わざと自分の手で打割つたか。

お菊。は。。



播磨。むい。(十太夫と顔を見合せる。) さりとて氣が狂ふたことも思はれぬ。それには何か仔細があらう。私が直々に吟味する。十太夫は暫らく遠慮いたせ。

十太夫。いや、はや、呆れた女でござる。こりや、お菊……。

播磨。(悶れる。) よい、よい。早く行け。

(十太夫は上の方に引返して去る。)

播磨。こりや、菊。そちは何と心得て、わざと大切な皿を割つた。仔細を申せ。(物柔かに云ふ。)

お菊。恐れ入りましたしてござりまする。

播磨。最前も申す通り、其の皿を割れば手討に逢ふても是非ないのぢや。それを知りつゝ、自分の手で、わざと打割りしとあるからは、よくくの仔細が無くてはなるまい。つゝまず云へ。どうぢや。

お菊。もう此上は何をお隠し申しませう。由ないわたくしの疑ひから。

播磨。疑ひとは何の疑ひぢや。

お菊。殿様のお心を疑ひまして……。

(播磨は黙つてお菊の顔を睨む。)

お菊。この間も鳥渡お耳に入れました通り、小石川の伯母御様が御媒介で、どこやらの御屋敷から奥様がお輿入れになるかも知れぬといふ噂。明けても暮れても其ればつかりが胸に支へて……。恐れながら殿様のお心を試さうとて……。

播磨。むい。それで大方仔細は讀めた。それに就いて此の播磨が、そちを唯一時の花と眺めて居るか、但しはいつまでも見捨てぬ心か、其の本心を探らう爲に、わざと大切の皿を打割つて、皿が大事か、其方が大事か、播磨が性根を確かに見届けやうと致したのであらう。菊、たしか

に然うか。

お菊。はい。

播磨。それに相違ないか。

お菊。はい。

(播磨は矢庭にお菊の襟髪を取つて縁に捻伏せる。)

播磨。えい、おのれ、それ程までにして我が心を試さうとは、餘りと云へば憎い奴。こりや能く聞け。天下の旗本青山播磨が、戀には主家來の隔てなく、召仕へのそちと云ひ交して、日本中の花と見るは我宿の菊一輪と、弓矢八幡、律義一方の三河武士が唯一筋に思ひつめて、白柄組の附合にも吉原へは一度も足踏みせず、丹前風呂でも女子の杯は手に取らず。仇同士の町奴と三日喧嘩せぬ法もあれ、一夜でもそちの傍を離れまいと、堅い義理を守つてゐるのが、嘘や偽りでなることか、

積つて見ても知るゝ筈。何が不足で此の播磨を疑ふたぞ。

(お菊の襟髪を掴んで小突き廻す。お菊は倒れながら泣く。)

お菊。その疑ひも既う晴れました。お免しなされて下さりませ。

播磨。いゝや、そちの疑ひは晴れやうとも、疑はれた播磨の無念は晴れぬ。

小石川の伯母は愚、親類一門が何と云はうとも、決して他の妻は迎へぬと、あれほど誓ふたを何と聞いた。さあ、確と申せ。何が不足で此の播磨を疑ふた。何を證據に此の播磨を疑ふた。

お菊。お前様のお心に曇りのないは、不斷から能く知つてゐながらも、女の浅い心からつい疑ふたはわたくしが重々の誤り、眞平御免下さりませ。

播磨。今となつて詫びやうとも、罪のない者を一旦疑ふた、ちのれの罪は生涯消えぬぞ。さあ、覺悟してそれへ直れ。

(播磨はお菊を突き放して刀を引寄せる。下の方より庭傳ひに奴權次走り出づ。)

權次。もし、殿様。暫くお控え下さりませ。先刻から物蔭で窃と立聞をして居りましたら、お菊どのが大切のお皿を割つたとやら、碎いたとやら。そりやもうお菊殿の落度は重々、その辱細い素つ首をころりと打落されても、是非もない破目ではござるもの、多寡が女子ぢや。骨のない海月や豆腐を料理なされても、何の御手堪えもござるまい。先刻の喧嘩とは譯が違ひます。こゝは何分この奴に免じて、其のお刀はお納めなされて下さりませ。

播磨。そちが折角の取なしぢやが、この女の罪は赦されぬ。何にも云はずに見物いたせ。

權次。一旦斯うと云ひ出したら、跡へは引かぬお氣性は、奴も豫て吞込んで居りまするが、何ぼ大切の御道具ぢやと云うても、一人の命を一

枚の皿と取替へるとは、此頃流行る取替へえの飴よりも餘り無雜作の話ではござりませぬか。どうでもお胸が晴れぬとあれば、殿様の御名代に此の奴が、女の頬桁二つ三つ殿倒して、それで御仕置はお止めく。

播磨。え、播磨が今日の無念さは、おのれ等の奴が知る所でない。いかに大切の寶なりとも、一人の命を一枚の皿に替へやうとは思はぬ。皿が惜さに此の菊を成敗すると思ふたら、それは大きな料見違ひぢや。菊、その皿をこれへ出せ。

お菊。は。。

(時の鐘聞ゆ。お菊は箱より恐るく一枚の皿を出す。播磨は其の皿を刀の鍔に打ち當て、割る。お菊も權次も驚く。)

播磨。それ、一枚……。菊、後を數へ。お菊。一枚……。

(お菊は皿を出す。播磨は又もや打割る。)

播磨。それ。二枚……。次を出せ。

お菊。三枚……。

(播磨は又打割る。權次も思はず伸び上る。)

權次。お、三枚……。

播磨。次を出せ。

お菊。四枚……。

(播磨は又もや打割る。)

播磨。四枚……もう無いか。

お菊。あとの五枚はお仙殿が別の箱へ入れて持つてまわりました。

播磨。む、播磨が皿を惜むので無いのは、菊にも權次にも判つたであら

うな。青山播磨は五枚十枚の皿を惜んで、人の命を取るほどの無慈悲

な男でない。

權次。それほど無慈悲でないならば何でござく御成敗を……。

播磨。そちらには判らぬ。黙つて居れ。併し菊には合點が參つた筈。潔白な

男の誠を疑ふた、女の罪は重いと知れ。

お菊。はい。よう合點がまわりました。此上は何のやうな御仕置を受けま

せうとも、思ひ残すことはござりませぬ。女が一生に一度の男。(播磨

の顔を見る。)戀に偽りの無かつたことを、確かにそれを見極めましたら、

死んでも本望でござりまする。

播磨。若し偽りの戀であつたら、播磨もそちを殺しはせぬ。偽りならぬ戀

を疑はれ、重代の寶を打割つてまでも試されては、何うでも赦すこと

は相成らぬ。それ、覺悟して庭へ出い。

(お菊の襟裳を取つて庭へ突落す。權次は慌て、お菊を圍ふ。播磨は庭下駄を穿